

---

# 妖魔紀伝

Zexeed

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖魔紀伝

### 【Nコード】

N1765D

### 【作者名】

Zexeed

### 【あらすじ】

突如人間界に現れた「妖魔」とさまざまな面でそれに関わっていく主人公「切裂剣妖」とその仲間達の戦いの第一章。

## ブログ&amp;キャラクター紹介＋一部専門語紹介

地球上で謎の殺人及び行方不明等の事件が発生。

また、大陸の急激な変動なども起こる。

それにより、世界は大きく変わってしまった。

調査隊が結成され、その原因がようやく分かった。

それは、未知の生命物体によるものだった。

この生命物体、1匹どころではすまない。

その生命物体は、人間に害をもたらす「魔」のつかい…「妖魔」と呼ばれた。

世界は妖魔に対抗すべく、ハンターの集団をつくりあげ、本格的に妖魔への戦いを仕掛けていった。

そしてようやく一時的にその騒動は多くの被害を出しながらも終わった…一時的に…

ここからは、時に妖魔に対抗し、時に妖魔のためにことをする、そして世界を変えていくこうとする1人の少年とそして仲間となっていく者の物語である…

以下、登場人物と専門語の解説ですが

携帯から閲覧されている方はPCからの閲覧をお勧めします。

登場人物（随時更新）

・切裂剣妖きりさきけんよう … この物語の主人公、明るい性格な男。剣を使つての戦いを主とする。現在所持している剣は黒竜と蜘蛛の妖魔から貰つたスパイダ・セイバー。数年前に父を妖魔に殺されているが、それをきっかけに妖魔が一体何をしようとしているのか知るための旅に出ることにした。「セイズ」という謎が多い真人族の妖魔の男と契約をしたが、むしろ疑問が増えるだけであつた。14歳

・切裂剣斬きりさきけんざん … 今はもう亡き剣妖の父親。妖魔ハンターのエイレクス支部リーダー。息子の剣妖をかばって死んでしまった。

・ジョーカー … 剣斬直属の妖魔ハンターだった男。剣妖らの行く先々でサポートをする。

・セイズ … 剣妖と契約をかわした妖魔。真人族の男。いろいろと謎が多い。妖魔だが、人間達に対する敵意のない存在であつた。契約をかわした妖魔は契約者となる人間と一体化に近い状態となるが、契約者の外見に変化は特にない。

・撃双サイガげきそう … セリユアラ手前で剣妖が出会つた契約者。腕に大きい爪を装備して戦う。真人族のティールガという男の妖魔と契約している。少々横暴な性格であり、剣妖のことを「ライバル」的存在として見ている。過去が明白ではない。15歳

・深理楓香しんりふうか … ルクレイへ向かう途中の森を抜けた先の草原にいた少女。なぜそんなところにいたのかはまだ定かではないが、理由つけて剣妖たちについてきた。契約者で、契約している妖魔はフェジリアという獣人族の男。そのため、剣妖やサイガとは少し違つた。「自らの体に本物の羽がつく」能力を持つ。ただ、エイレクスの苗字と名前を持っているのに、金髪に緑色の眼なため、他国人としか思えない点がある。サイガと同じく、過去は明白ではない。何気にス

タイトルは結構いい。14歳

専門語（劇中で語られていないものを含む）

・ 現行世界Ⅱ 異人界

人間が暮らす世界のこと、表の地球とも言つ。

剣妖たちは現行世界と呼び、魔界の住人は異人界と呼ぶ。

また、魔界の一般的な住人からしてみれば、人間界の魔界の概念と同じく「フィクション」の存在である。

ちなみに「世界全体の言語統一」がなされている。

・ 魔界（希素の説明を含む）

一般的に「魔界」というと悪魔や妖怪、魔物のすむ世界であり「よいイメージ」がない世界である。

が、妖魔紀伝シリーズにおいては「妖魔」が住む世界というため、現行世界の人間が名をつけただけであるため、それらとは異なる。

（尚、現行世界の住民と違い魔界のことを魔界の住民は「世界」という、が、一部の者は「魔界」とも呼ぶ）

妖魔紀伝シリーズでは、魔界というのは重力の差などによって生じたそれぞれの星々に存在する反世界である。

まず、現行世界との相違点であるが反世界のために「昼夜」が存在しない。

の内側の世界といえは分かりやすいが、魔界にとっては地の底にあるものが宇宙なのである。

（しかし、貫通させることは不可能である）

これにより、光源体である太陽も地の下ということになり、昼夜が存在しなくなる。

しかし、太陽は存在していないわけではないため、その熱は伝わるでは、なぜそんな世界で生物が生きていけるのか

簡単な話しにすると、魔界には「窒素」が存在せず「希素（現行界の住人いわくは「魔素 - i v i l i s」）」が存在する。（尚、魔界にも酸素は存在し、それがなければ生物は生きてはいけないという事実は変わらない）

この希素というものは夢のような元素である。

まず、希素が窒素と結合すると分子外電子反応が起き、発光する。

窒素は魔界には存在しないが、人間界に存在する。

すなわち現行世界と繋がるインビンジ・ゲートの元には存在し、そこから発光している。

ただしこれは「窒素<希素」でおきる現象であり、現行世界においては「窒素>希素」となるため

「妖蓄鉞ようちゆうせき」という発光する固体となる。

妖気というのはこの「希素」と「気力（生氣）」が反応することによって確認されるものである。

（それゆえに、妖気を使った波動などは現行世界では「光る」こともある）

この希素によって、魔界の生物は進化したというわけである。

また、このように「気力」と反応するため、例えば飢えた犬などは、その思いと気力から「狂犬」と化すことなどもある。

そのため、狂うものは驚異的な力を手にすることなどもある。

しかし魔界自身は広い世界であるために、魔界の住人でも知らないことが多い。

#### - 主な魔界の種族

魔界においては多数の種族が存在する。

- ・「現行世界の支配者である人間」に最も似ている「真人族」
- ・獣から希素で人のような姿へと進化を果たした「獣人族」
- ・植物から動物へと進化することに成功した「植人族」
- ・体の主成分に金属物質が多く混じりこんだ「金人族」
- ・強大な妖力があり、あまり表層には現れずひっそりと暮らすことが多い「真魔族」

他、妖魔とは呼ばれない者には「人魚族」などが存在する（本編にて解説される）

また、上記の者達は全て「人」と呼ばれるものである。

・神（1章～4章までの登場予定はなし）

インビンジ・ゲートに住んでいた特殊な住人という風に考えるのが一般的である。

そもそも、インビンジ・ゲートは1cmにも満たないものであるが、その「存在が考えられない先」に存在するものは「人知を超えた力」を持つという。

しかし、2つの世界への干渉はほぼできず、主に見ているだけの存在である。

また、神だからといって「絶対」ではない。あくまで世界というものは「自然現象」による産物であり、神とはいえどもそこまでには至らない。

## 第1話 運命…

ある日…この日が運命の日となることなど誰も知りはない

大国エイレクス、元日本

この国に剣妖けんようの家はある

剣妖が階段から降りてきた

「おお、起きたか」

そういったのは彼の父、きりさきけんざん切裂剣斬であつた

「父さん…今日も仕事…？」

「悪いな…ここどころ全然休みがとれないんだ」

「せつかく10歳にもなつたつていうのに…仕事ってなんなのさ」

剣斬の目つきが少し変わる

「お前に話す必要は無いといったはずだ」

「またそればかり…」

剣斬は一度も自分の仕事を剣妖に話したことが無いのだ

と、呼鈴が鳴る 剣妖は扉を開けた

「あ、ジョーカーさん」

「おはよう剣妖君」

このジョーカーと言う男、剣斬の後輩…というらしい

「ジョーカー、どうしたんだ？」

という声とともに剣斬が玄関に出てくる

「剣斬さん、迎えに来たんですよ、前に言つたじゃないですか」

「そういえばそうだったかな…まあいいや、とりあえずあがつときな」

「じゃあ俺外行つて来るよ」

剣妖は外に出た と、ここであることに気づく

「（あれ…車にエンジンがかかりっぱなしだ…）」



と、ここで剣妖はあることを思いつく

「（そうだ、この車の裏に忍び込めば父さんの仕事場にいける…）」  
剣妖はトランクを開け、そこに入った

10分後、剣斬とジョーカーが家から出てきて車に乗り込んだ  
そうして目的の場所へと車は向かっていった

剣妖は父達の話も聞こうとしていたが、声が小さくあまり聞こえなかった  
だったので目的地に着くまで

父達の仕事を知ることはいできない

…それからどのくらい経っただろうか 剣妖はトランクの窓から沈む夕日を見ていた

「（…何時間走ったんだ…それにここは…）」  
辺りには見たことの無い景色が広がっていた

## 第2話 突然の悲劇

車は止まった。いや、止まっていたのに剣妖がきずいていなかっただけのようだ。

ついさっきまではかすかに聞こえていた剣斬とジョーカーの声も一切聞こえなくなってしまった。

「（マジでここ何処だ…）」

さすがに剣妖も気になったので、車から降りた。辺りは木ばかりで周りには人の気配も無かった。

しかし剣妖はてきとうに先へと進んだ。頼りになるのは自らの勘だけだと考えたらしい。

意外にも勘は見事に的中した。すぐ近くで金属音のような音が聞こえたからだ。

彼は音のあった場所へ向かって走った。すると人影のようなものが見えた。

「父さ……！？」

剣妖は一瞬何が起こっているのかわからなくなった。すぐさま彼は近くにあった大木の後ろに身を潜めた。

「（な…なんだ今の…？）」

剣妖は再びその大木の陰からのぞいてみた。

そこには右手に刀を持った剣斬と両手に銃を持ったジョーカー…

そして得体も知れない長い牙の生えた二本足で立っている狼のようなヤツが十数体…

「くそっ…今までの奴らよりは遥かに力がありやがる…」

「（なに言ってるんだ父さん！？今までの奴って…？？）」

そんな中一体の謎の生物が剣斬に向かって襲い掛かってきた。

剣斬はそいつを持っていた刀で斬った。

「まとめて切る！」

「援護します、剣斬さん」

剣妖はそれを見ているだけだった。体が動かない、頭の中は真っ白になっている。剣斬とジョーカーは周りのヤツらを次々に倒していった。あつという間に周りの敵は全滅した。

急に剣妖の足もとがくらついて木の前へと出てしまった。しかし、剣妖は何が起きているのかすら分かっていない。

「剣よ……！」

剣斬は剣妖に……そしてその背後の謎の生物にも気がついた。

彼は剣妖に向かって走り出した。謎の生物も爪で襲い掛かろうとする。

ズグシャツツ……！！その音の後剣妖の前には謎の生物を刀で切ったが爪に引き裂かれ血が出て倒れこんだ剣斬がいた。

「……ハツ………と……父さん……！！？」

剣妖は意識が戻った。しかし既に遅かった……

彼の足元には倒れこんだ父親と引き裂かれて真っ二つになった謎の生物と赤黒く染まった刀があるだけだった。

「父さあああああん！！！！！！！」

### 第3話 天命と始まり

車の中、剣妖は助手席に座っていた。

「…剣斬さんはいずれこうなることが分かっていたんだ…」

ジョーカーは運転する中彼に話しかけた。後ろには剣斬が横になってイスの上におかれていた。心臓は既に止まっていたのだった。

剣妖は何も話そうとはしなかった…

朝方、車は剣妖の家の前に着いた。剣斬はその時先に家にいた謎の人達によってどこかへと運ばれた。2人は家の中に入り、リビングのテーブル前のイスに向かい合って座った。

「……ジョーカーさんや父さんは何なの…」

剣妖は口を開いた。

「僕たちは『妖魔ハンター』っていうんだ。…さつき君も見たあの変な生き物のことを僕たちはまとめて妖魔って呼んでるんだ。最近起きている原因不明の事故を起こしているのが奴らなんだ。それでそいつらを倒して事故を減らすっていうのが第一の仕事。剣斬さんは僕たちの上司に当たっていてね…」

ジョーカーは言い辛そうだったが、剣妖はその話を真剣に聞いていた。

「…剣妖君はこれからどうするんだい…もうこんなことに関わりたくはないと思うけど…」

剣妖はそれを聞いてうつむいてしまった。

「そうだ…剣斬さんが言っていたことがある…剣妖君、ちょっとついて来てくれないか。」

ジョーカーはそう言うのと立ち上がり外に出た。剣妖もその後を追いかけた。

2人は家の後ろにいた。

「確かここだったな…」

ジョーカーはなにやら印のついた地面を掘り始めた。剣妖はそれを

不思議そうに見ていた。

「……………」

すると地中から土まみれの刀が出てきた。

「ジョーカーさん、それ…」

剣妖は続けて言おうとしたがジョーカーが割り込んで話をしてきた。

「これは剣斬さんの最高の『相棒』だったんだ、僕よりね。」

ジョーカーは立ち上がった刀を両手に持ち、剣妖の前に立った。

「剣斬さんがこうなることを分かっていたってさっき言ったよね…」

剣妖はそう言うとなを向いてしまった。ジョーカーはそうなるだろうと思っていられないが、話を続けた。

「剣斬さんは言っていたよ。この刀を剣斬さんが使うのをやめたのはどういう理由かは分からないけど、一つだけ『オレは常に死と隣り合わせにいるんだ。剣妖には戦いには巻き込まれてほしくないと思っている。でもそれはあくまで表面上、親としてだ。だが剣斬としてのオレは本当は戦ってほしいと思っている…』ってね。」

ジョーカーは刀を前に出した。剣妖は何かに駆られその刀を受け取った。

「その刀の名前は『黒竜』さ。刃が黒いんだ。その刀をどうするかは君の自由だけど君の未来は今決めないといけない。」

「オ…オレは……………」

それから約4年もの月日が流れた。その日、剣妖は森の前に立っていた。彼の腰には黒竜がついていた。後ろにはジョーカーが立っていた。

「行くんだね…」

ジョーカーは決して止めようとはしなかった。

「この森を抜ければルクレイにつく。あらかじめ国を出るのはこっちで何とかしておいたから。…ここから先は何かあるか分からないよ。」

「分かっていきます。でも、もう行くんで。」

剣妖の眼に迷いはなかった。

「君が妖魔ハンターにならなかったのは正解だったと思うよ。妖魔にはまだ僕らにも分からないことが多いからね。」

剣妖は後ろのジョーカーを向いてうなずいた。

彼は旅立った。これが全ての始まりとなった。

#### 第4話 剣妖の目的 - 危機 -

剣妖は森の中にいる。

入ってもう十数時間たったが今日中には抜けられそうにはない。彼はそう悟った。

と、そこで彼は大きな木を見つけた。おそらく彼の8倍以上の幅はある。

仕方がないので今日はそこで寝ることにした。

「（にしても不気味な森だな…まるで監視されてるみたいな感じだぜ…）」

辺りには木や草しか見当たらない。

剣妖がもう眠くなってきたその時、彼は自分の足に違和感を感じた。見ると右足が太いつるに締め付けられている。

「（な…！？）チイツー！」

剣妖はすぐに自分の腰から黒竜を抜いて、そのつるを切った。その中からは怪しい濃い紫色の液体が勢いよく飛び出てきた。しかしそのつるは切り取れはせず、奥のほうに引いていった。彼はすぐに立ち上がってそのつるを追いかけていった。草をかき分けてその先に見えたものは、

『口のついた木の化け物』だった。しかもそいつはさっきまで彼が寝ていたあの木と同じくらいの大きさがある。が、そいつは剣妖が追ってきたことにも気づいていないようで、そいつのもとの方は普通の木のように地に根でへばりついていた。

「（あいつがオレに気づく前に…）つおおらああ…！！！」

剣妖はそいつに向かって切りかかった。しかし、一刀両断とはいかず、少々深い傷が付いただけであった。しかもそのせいでそいつは剣妖に気づいてしまった。そいつは奇怪な叫び声をあげて剣妖にさっきよりも太いつるで襲い掛かってきた。

「うわっ…！！！！（あ…危ねえ…）」

劔妖はかろうじて後ろに下がってよけた。しかしすぐに二発目がきた。二発目は真っ直ぐ彼に向かってきたので彼は劔を横に振った。が、つるは黒竜を感知したのかどうかは知らないが、よけて劔妖の喉めがけて向かってきた。劔妖は劔の振りはずしたせいでバランスが崩れて体勢を立て直せないでいる。

「（しっ…しまった！！！！）  
ズグツシャアッ！！！！」

…森の中で何かが噴き出す音が響いた…



## 第5話 剣妖の目的 - 攻め -

「!!」

剣妖は最初にいたあの木の根元で持つてきた毛布をはおって寝ていた。少し離れたところで焚火が炊かれていた。と、そこに誰かがいるのに気付いた。コートを着た銀色の髪の子だった。彼はすぐに体を起こした。その音でその男も剣妖が起きたことに気付いた。

「どうやら目が覚めたみたいだな。」

その男は剣妖のほうに歩いてきた。剣妖は念のため腰に手をのばして黒竜に手をかけようとした。が、なんとその男の右手が剣妖の首をつかんでいた。一瞬のうちにその男は剣妖の目の前まで来ていたのだった。

「な!! てめえ……」

「おいおい、命の恩人に対してそれはないんじゃない。それとあれ……」

その男は後ろの焚き火のほうを見た。そこには黒竜がおいてあった。剣妖は無言で睨みながら手を振りほどき黒竜に駆け寄って取った。

「まあとにかく、そんなに焦らないでそこに座りなよ。」

剣妖は渋々その場に座った。

「（一応あいつから殺気は感じねえからな……でも……）」

剣妖にはどうしても気になることがあった。

「聞きたいことがあるがいいか？」

男も焚き火を境に剣妖の向かいにそう言いながら座った。

「別にどうぞ……」

「そうか……じゃ、言わせてもらうか……」

男の目つきが厳しいものになる。

「お前……なんでここにいるんだ？」

男は上から目線で言った。

「それがなんなんだよ、お前には関係のないことだろ。確かに助け

てもらったことには感謝するが…」

「じゃあこれを聞いたらどう思う…」

剣妖は自分の話を止められたことに少し苛立ちを感じたが、男の話を聞くことした。

「オレは…妖魔だ…」

本来なら事情を知っている人間なら驚きを隠せないであろう。しかし剣妖は冷静だった。

「……………やっぱしな…」

剣妖にはもう分かっていたのだ。

「分かっていたらしいな…」

「ああ、だいたいこの森に入った時からオレの周りに何か妙な奴がいるっつーことは何となく感ずいていたのでな。それがお前だろ？」  
妖魔の男はフツと笑って立ち上がった。

「悪いことは言わん、ここからは立ち去った方がいいぞ。」

「な…お前それどういう意味だ!？」

剣妖もさすがに少し取り乱し、立った。

「お前は死ぬために旅をしているわけではないのだろう。」

男は上から目線で剣妖に話してきた。剣妖はその言葉に対して

「…だからなんなんだよ、オレは死ぬ覚悟はできている。」

「フ…じゃあ質問をもっと分かりやすいものにしてやるよ、…お前…何のために旅をしてんだ？」

男の目がより鋭い目つきとなった。

「そ…それは…」

剣妖は言葉が詰まってしまった。

「（オ…オレは一体何のために旅に出ようとしたんだ…父さんの敵をとるため…いや…でもそれにオレは…）」

剣妖の頭にはいろんなことが浮かんできた。彼はこの旅の重みを感じていた。たった一人の人間が妖魔に出会ったら普通なら殺される、そして自分がそのただの人間に当てはまることも分かってきてしまったのだ。だいたいジョーカーの元でいくら鍛えてもらったからと

いってもそのジョーカーの目指していた剣斬さえ妖魔によってあ  
なってしまったのだ。

「自分の無謀さを知ったようだな。ちなみにオレの名はセイズ、真  
人族の妖魔だ。今日はもう遅い。オレはもう行くからな、お前にそ  
れでも進むというなら行けばいい、オレは忠告をただけだからな。」

セイズと名乗ったその妖魔は立ち去ろうとした。

「…オレをおびえさせてもして立ち去ろうつつーのか…」

「フーン…意外に立ち直り早いね。」

「ああ、やっぱりオレは旅い続けねえといけないような気がするんだ。」

「へえ………!!?」

突然セイズは何も見えない横の茂みを振り向いた。

「まさか来るとはな…」

「来るって………?」

## 第6話 剣妖の目的・心境

「帰れとは言わんがすぐにここからは立ち去れ!!」

セイズは茂みに向かって警戒しつつ剣妖に対して叫んだ。

「一体何だつて言うんだよ! だいたいお前のことすらまだ…」

「離れろ!!!」

剣妖がセイズに話している途中でセイズは割り込んで怒鳴った。『さすがにまずいかもしいない』と思ったのか剣妖はその場から左へ2、3歩ずれた。それより1秒もしないうちにセイズも右上に大きく跳んだ。すると茂みから先ほどセイズと剣妖のいた場所2箇所とも通るようにして鋭い槍のような何かが反対側の茂みへと突き抜けていった。しかもとんでもない速さだった。

「…………!!」

しかし安心などできなかった。後ろからまたそれがやってきたのだ。かろうじて剣妖は避けて、すぐに黒竜を抜いた。

「(絶対にまた来るはずだ、そいつを仕留める!)」

剣妖の読みは見事的中した。また剣妖に向かってそれが向かってきたのだ。剣妖は切りかかろうとした。

「馬鹿野郎!! そいつに向かってくな!!」

セイズがそれを見て再び叫ぶ、しかし剣妖にはその声は聞こえていなかった。剣妖は両手で持った黒竜をそいつに向かって思いっきり振った。

キイイイイン!!!!!!

その音は鉄同士がぶつかったときのような音だ。

「!!!?」

こうなることなど剣妖には想像もつかなかっただろう。なんと槍のようなものが切れていないのだ。そのままそいつは剣妖に向かってきたが、幸い黒竜がはじかれたことによって左肩にかすり傷だけだすんだ。

「（なんだあいつは……）」

剣妖は左肩を抑えた。と、後ろから人影が飛び出てきた。セイズだった。

「てやあああつつ！！！！！」

剣妖は目の前の光景に驚愕した。セイズの蹴りがそいつを折ったからだ。

「！！！！（こ…これが妖魔だっていうのか……）」

剣妖は声も出なかった。だいたいそんな間にセイズは彼の真横から来たそれを避けてつかんだ。

「ようやく捕らえた……」

そう言うとセイズはそれをつたって茂みの奥へと走って消えていった。それを見ていた剣妖にはいろんなことが頭に浮かんできたが、出した結論は一つであった。そして剣妖はセイズと同じようにそいつをつたって茂みの奥へと走っていった。走っている間にいくつか剣妖のつたっている物と同じものが前方から向かって飛んできたが、剣妖は全て避けながら前進していった。またそれは彼にある確信を持たせた。

「（絶対にこの先にこいつの元凶があるはず……！！）」

暗くてよく見えない中だったが、剣妖は茂みから外に出れた。

「グアアアアッ！！！！！！！」

出た瞬間叫びが聞こえた。同時に「ズサッ」と何かが突き刺さるような音がした。剣妖はすぐさまその声のする方向に走った。

「セイズ！！！！！」

そこには右肩をあの槍のようなものに突き抜かれ、そのまま背後の木に貼り付けられているような状態になったセイズがいた。

「お…お前…立ち去れといったはずだろ……！！！」

セイズは彼を見るなりそう言った。

「…誰かに命を救われ、そのままそいつの危機を見捨てて帰る奴なんかいるのかよ…少なくともオレにはそんなことはできねえな。」

剣妖はセイズの正面に立ちふさがり、黒竜を再び抜く。

「おい、そんなことすると…」

しかし、セイズが注意しようとした時には既に彼の目の前からは二発目が向かってきた。が、劔妖は決して避けようとはしなかった。  
「来い！！」

槍のようなものは劔妖の左肩を狙ってきた。おそらく劔妖のいることなどには気づかず、そのままセイズを完全に貼り付けようとしているのであろう。

スパアアン……

一瞬だった。劔妖は先から少し後ろを切り、平らになった先を左手で押さえた。

「！（こいつ…短時間でこんなことを考えついたというのか…！）

………フ…フフフ…」

「！？な…なんだよ？」

劔妖は急に笑い出したセイズを不思議に感じた。

「フフ…いや…そういえばお前の名をまだ聞いていなかったな。」

「（こんな時に聞くことか？…まあいい）劔妖…切裂劔妖だ…」

「（切裂…！？…そういうことか…）なるほどね…」

セイズは少しニヤリと笑みを浮かべた。

「？」

劔妖には全然何がなんだか分かっていない。

「劔妖……契約だ…」

## 第7話 剣妖の目的 - 決断 -

「？契約…何のことだ？」

剣妖には全然意味がわからなかった。そもそも、こんなピンチにセイズはいつたい何を言っただって普通は思うはずである。

「手を出せ！オマエはここで死ぬようなほどの者じゃない。」

「き…急に何を…」

そんなことを言っている間にセイズのほうから剣妖の手をつかんできた。

「オマエには妖魔と戦う覚悟…そして、妖魔と共に進む覚悟がある…そしてそのためにはもつと力が欲しいと思っっているだろ…オレにはそう見えるがどうなんだ。」

「意味わかんねえよ…」

剣妖にとって急にそんなことを言われてもどうも対応のしようがなかった。

「それもそうかもしれない…でも、ここでこのまま死んで納得がいくか…？」

「……死ぬんならその前に悔いがないようにしてえ…その契約とかいうやつ…よく分かりやしねえけど…力が…戦っていける力を手にできるんなら…やってやろうじゃねえか…！！」

剣妖はセイズの手を自分から強く握った。

「フン…これからおまえはオレの契約者だ…そうなるんだからオレに恥をかかせるようなことは許せはしないからな…」

セイズはそう剣妖にささやいた。

「お前こそ、変なことをしやがったら世界の果てまで追って消し去ってやるからな…」

剣妖のその言葉にセイズは少し笑みを浮かべた。

セイズは眼を閉じ、なにやら集中し始めた。そして、二人の手の間で強く青白く輝く光が放たれ、その光は徐々に広がっていき、つい

には二人を完全に包み込んだ。剣妖はその光の中、自分の中に何かが入ってくるようだった。

「これから起こること…全て受け入れていけよ…」

剣妖にはセイズの声がかすかに聞こえた。だが、それは耳から入ってくるようなものではなく、

むしろ自分の中から聞こえてきているように彼は感じた。

次の瞬間、剣妖の脳裏に何かがよぎった。

それはあまりにも一瞬で剣妖自信なんなのか分からなかった。が、何かがあつたことは確信できた。そして青白い光は消えていく…光のあとに残っていたのは剣妖一人だけであつた。

「これは……」

剣妖は不思議だった。妙な力を感じるのだ。それは自分の真正面の奥からだった。

『来るぞ…！』

「！？……」

今聞こえた声はまさしくセイズのものであつた。しかし、ここには剣妖しかない。

「あ…あれは…！？」

剣妖の目の先にあの槍のようなものが見えた。

「！……！」



## 第8話 剣妖の目的・信頼

剣妖は槍の元へと走って向っていた。目の前からは槍が彼に襲い掛かってきている。が、彼は別にそれを恐れても怖がってもしなかった。

「来やがったな…」

剣妖はすかさず手を裏返してつかみ、そのまま手を滑らせてよけた。

「…いまだに信用できないのか…？」

セイズの声がした。しかし、剣妖はもう驚きはしなかった。

「…いや…そうじゃない。（…何となく予想できるが『契約』って……）」

「契約のことか…」

「え!？」

剣妖はそのセイズの言葉には驚いた。自分が考えただけのことに返答をしてきたからだ。

「そういえばいつていなかったな、…契約というのは簡単に言うとおれたち妖魔の力をおまえ達のような人間に全て移すことだ。」

「…最終的には俺の体をのつとるとでも？」

剣妖の心情は驚きから少しだけ緊張へと傾いた。

「のつとる!?!…ハハ、全く面白いことを考えるな。だがそれは違う、だいたいお前の体をのつとるのならお前を殺してからやっているはずだよ。…それにオレ達のような契約をする妖魔の目的はそんなものではないな。」

「なら……!!」

剣妖にはセイズの目的が気になって仕方がなかった。しかし、彼の足は勝手に走っているようであった。

「そう力むな、まだオレの話も終わってねえだろうが。さっき言ったことの他に、契約は…そうだな、お前にオレが取り付いているみたいない感じだ。だからお前の考えとかも、オレに全部伝わってくる

んだ。』

剣妖は黙り込んでいる。ただ、考えていることはたった一つ、セイズのことだけであった。といっても、考えはまとまらず、頭の中にいろいろごちゃごちゃに浮かび上がってきているだけであった。

『オレがお前と契約した理由は後にでも話す。いいか、とにかくこれだけは信じて欲しい、オレはお前に危害をくわえる気は一切ない。それと……一つ聞きたい。』

「…何だ、お前はオレの考えを読み取れるんだろ、実態もねえくせに…」

『お前の口から真実を聞きたいんだ。…剣斬は…切裂剣斬は…死んだのか…』

セイズは剣妖が傷つくかもしれないと少し思った。しかし…

「…ああ、死んだよ。つい先日…な……オレの身代わりになってな。」

『あ…そうか……（こいつにとって剣斬のことは言うべきではないのかと思っていたのだがな…）』

逆にセイズの方が衝撃を受けたような感じになっていた。

そんな話をしている内に剣妖はなにやら広い場所に出た。

「…何か嫌な予感がする…」

剣妖は茂みから出た途端に足を止めた。

『それは、お前が妖気を感じ取れるようになったからだ。』

「妖気…」

剣妖にはおおよそ予想はついていていた。契約した直後から今までではなかった決して良いものではない空気を感知取っていたからだ。

『ああ。妖魔が持っている力が妖気、といってもパワーとかそういうものではなく、エネルギー的なものだがな、それにお前だってオレと契や…』

「来る…!」

すると、すぐに剣妖の目の前からアレが飛んできた。

「ん…!?!」

剣妖は少し何か不思議に感じつつ、体を右にそらして避けた。

「（今、一瞬アレが木の枝のように見えたような…）」

『あながち間違いじゃないぞ…』

「??？」

剣妖にはそのセイズの言葉の意味がイマイチよく分からなかった。

が、この先に向って進めばその答えが分かると思っ  
て再び走り出した。

## 第9話 結論と当て

日が昇ってきていたので辺りは既に見通しがよくなってきた。

「こ…こいつがあいつの元凶か…」

剣妖の目の前にはあの時に会った木の化け物がいた。

『そう、その通りだ。それとあれはつるじゃなく、あいつの枝が少し変化したものだ。』

「…にしてもなんか光ってねえか…？（オレが会った時にはただの木とそう外見は変わらなかったような…）」

剣妖の目は正しかった。その木の化け物は何やら金属のような体であつた。

『そうだな…あいつは植物系の食人植物の仲間だ。そいつらの中には体を硬化できるものがいてな、あいつもその部類だろう。』

「（…さっきから攻撃して来ねえな…どうかしたのか…？むしろ不気味だ。）」

剣妖がここに着いてから木の化け物は微動たりとしなかった。

『あいつの枝は血によく反応するからな。』

「なんだそんなことかよ。じゃあ手っ取り早く…」

剣妖はそう言いながら黒竜を引き抜き、近づいていく。

『待て！むやみに近づくな！…！』

「え…」

その瞬間、剣妖の足場が持ち上がりだす。彼はすぐに後ろへと下がる。

「な…何だ！？」

『やられたな…』

辺りの地面から木の化け物のでかい根が出てくる。そして何本もの枝が剣妖に向って襲い掛かってきた。

「うおっ！？」

剣妖は何とか枝のないところへ避ける。

「な…なんで急に…!?!」

すぐに次が来た。剣妖は黒竜で目の前の枝を強引に切り、そこに入  
ってやり過ごす。

「あいつがトラップかなんか仕掛けてたんだろ。多分そいつのお  
かげでお前のいる場所が分かるんだろよ。」

「なるほどな…なら…」

剣妖は化け物に向って走り出す。

「お前、何を!?!」

「決まってるだろ!このまま逃げてたらこっちのスタミナがもちや  
しねえ。なんなら、多少無理してでも強行突破するしかないだろ!」  
と、その時剣妖に一発、鞭のように枝が彼の背を打った。

「ぐあ……!?!」

剣妖はその場にうつぶせに倒れこむ。

「大丈夫か!?!」

「へ…たいしたこと…ねえよ…」

すぐに追い討ちをかけるように、先を尖らせた枝が剣妖の背を目が  
けてとんで来た。

「誰が切っていいって言ったか?」

剣妖は体をひねらせ、それと同時に振った黒竜で枝を切った。

「気をつけるよ、アイツの枝の先には毒素と吸血作用もある…」

「時間がねえ、サイズ…アイツの目の前に速攻で近づけるような何  
かい案ねえか…」

このままだと剣妖はむかつてくる枝の餌食になる。そんな中、剣妖  
は枝を避け、切る、その行動を続けていた。

「……よし…剣妖、後ろ向け。」

「!?!」

剣妖は少し驚きつつも後ろを向く。すると目の前からは剣妖むかつ  
て直線状に枝がとんできた。

「そいつを縦にぶった切れ!」

「てやあああつ!?!」

剣妖は迷いなく、叫びとともに切りかかっていった。

音はたたなかつた。スツと枝は縦に裂けるように切られたからだつた。

『今だ!!』

剣妖はもう大体分かつていた。すぐにわずかな反動を利用して、木のほうへ体の向きを変えて、木へむかつて裂けた太い枝の間を走る。すぐに木の化け物の前に着き、彼は枝を踏み台のようにして跳んだ。  
「食らいやがれ!!」

上空から黒竜が化け物へ降りかかろうとしたとき、枝が剣妖の真正面から、彼の胸めがけてむかつてきたのだ。

『剣妖!!』

しかし剣妖はすぐに身をそらして避けた。が、それによって空中での彼のバランスが崩れてしまった。

「とどけえええ!!」

ザシュ……

『しかしまあよくやったもんだな。』

既に日は昇りきっている。朝7:00くらいだろう。剣妖はうつろとして木陰で休んでいる。

「へ……まあな……」

あの時、剣妖は黒竜を木の化け物に突き刺したのであった。運が良かったのか急所を突いたらしく、一撃でしとめることができたのだつた。

『……で、おまえはこのまま当てもない旅を続けるのか?』

「当てもないって言うなよ……でも、とにかく旅は続ける。確かに当てとかそんなのはキツパリとは決まったとは言えねえけど、とりあえず、今この世界に何が起きているとか……知っておかなきゃいけないような気がすんだよ。（そもそもオレ、こんな時代なのに学校なんかに行つてなかったからな……）」

剣妖は立ち上がる。

『…と、言っても行く先が決まっていけない旅など…』

「なあに、オレが言ってるのは『行く当て』じゃなくて『行っことの当て』さ。行く場所なら決まっている。セリユアラだ。」

剣妖は歩き始めた。

『セリユアラ…か、そりやどこだ？それに何かあるとでも…』

「こっから真東、幸いあの化け物がいたところが道の上だったからなこの道をたどってけば着く。あるものといえば…聞いた話なんだがセイズ、お前『インビンジ・ゲート』って知っているよな。」

『…そういうことが。』

「じゃ、向かうとするか！」

さすがに剣妖も疲れてはいるはずだが、どういうわけか体は全然大丈夫であった。

『それと、お前が心の中で思うだけで俺には伝わるんだからな。』

「分かったよ」

剣妖はそれでも話している。

『…（心配だ…だが切れ剣妖、面白い奴だ。ふ…オレも契約してからこのようなことを思うのかな…）』

「どうかしたのか？」

『いや、別に。』

「…変な奴。」

『フン、お前に言われる筋合いはない。』

剣妖は少し笑みを浮かべ、道を歩んでいた。

## 第10話 遭遇と…

歩き初めてもう昼にもなった頃だった。

「なあ、この森ってそんな長いかな？」

『…オマエそんなことも知らずに来たのか？』

セイズの声は少しあきれているようにも聞こえた。

「いや、その…父さんの知人（知人って言うのか？）から聞いた話じゃそんな長いようなところじゃないって言うことだったんだが…」

『ああ。オレも何度か行ったことがあるし、この道で行けば…』

その時、剣妖もセイズも数メートル先が開けていることに気づいた。それを見て剣妖は走り出した。

「よっしゃ！ようやく着いたぜ！セリユアラ！」

目の前には小さくとも街が広がっていた。セリユアラ、エイレクスから北アメリカ大陸まで行く途中にある国で、エイレクスの隣国でもあるので案外すぐ着く国である。剣妖はたった2日でも森の中で過ごしていたので、少し新鮮な気分になった。

「…！（何だ…今は…）」

彼が進もうとしたとき、彼、そしてセイズがはつきりと感じた。

『妖気だ！』

剣妖はあきらかにこの妖気が殺意のあるものだと思った。すぐに腰の黒竜に手をかけ、迎え撃つ体制になった。

「（来る…！）」

彼は体をひねらせ、その勢いで黒竜を抜刀し、後ろにそのまま切りかかった。

キイイイン

「な！？」

金属音が鳴り響く。黒竜と鉄でできたやや大きな目の爪がぶつかっていたのだ。剣妖の目の前にいるのは髪が白と黒にわかれ、その鉄の爪を右腕につけている赤い目の男だ。エイレクス人でないことは分



かったが、彼は不思議に思った。

「（何か違う、何か妖魔とは違う…）チッ！」

剣妖とその男はお互い後ろに下がる。すぐさま男は襲い掛かってきたが、剣妖はそれを黒竜でしのぐ。が、

「ぐ……（力が強ええ！？お…オレは契約したつてのに…）だあッ！！」

男に力では相性が悪いと思った剣妖は、右に少し重心をかけ、男の力を利用して右に出て距離をとる。

「っああっ！！」

勢いをつけ、そのまま男に切りかかろうとしたその時、

『やめろ！剣妖！』

セイズの声が彼の脳裏に響く。

「（何でだよ！？やらねえとこっちが…）」

剣妖の言うとおり、男も剣妖にむかつて来ている。

『とにかくやめろ！！』

「く……」

剣妖は左足で休息にブレーキをかけて止まる。もはや集中できなかつた。

「「何でだよ！？」」

「へ……？」

「あ……？」

剣妖は訳が分からなかった。男もその場で止まっているのだ。それもまるで剣妖と同じように…

ましてや二人の声がかぶった。

「オイ、てめえ…名は？」

男がにらむような視線で剣妖に問いかけてきた。

「切裂…切裂剣妖だ…こういう時はお前から名乗るはずだが…」

「キリサキ…か…オレの名は撃双サイガ…」

『奴もまた、ひとりの契約者だ。』

剣妖はただ立っているものの、サイガという男はいつでも飛びか

れるように構えている。しかし二人とも動かない…いや、動けなかった。

「テイルガ…来ているな…」

「テイルガ!?!…」

『おそらく奴と契約したものの名だろう。だが、今はそれよりも…』  
剣妖は黒竜を握る力を強め、そして目を閉じて集中した。彼もまた、サイガと同じものを感じていた。

「(5…いや、6体か…)」

「そこかああ!!」

サイガが近くの茂みへと飛びかかっていった。剣妖もその声に反応してしまった。

「な!? バカ!!」

剣妖にとつてこれは嫌なパターンでもあった。彼の周りの茂みから3匹ほどの少し大きいハイエナのようなやつらが彼に向かって襲い掛かってきた。一匹目が爪で襲い掛かってきたのを何とか黒竜で防ぐことに成功した剣妖だが、2匹目が肩に1匹目と同じように襲い掛かってきたのを避けられず、服が少し破られ、血が出た。3匹目は服を噛みちぎっただけであつた。とりあえず1匹目の頭上を飛び越えて彼は体勢を立て直す。

「(クソッ…一人でこの妖魔どもを相手しねえといけねえな。)」

『やつらは下等の獣人族の1種だ。頭脳戦を征せば正気はあるが…』

「(だが力はあるのサイガつつー男以下だ。何とかなる…!)」

剣妖はすぐに最初に襲ってきたやつにかかっていった。そいつも彼めがけて飛びかかる。それを狙っていたかのように、剣妖に少し笑みが見えた。彼は黒竜を空中で手から離し、通常の刀とは逆に、刃先が下を向くように持った。そして、そのまま彼は手を上げ、いとも簡単にその妖魔の首を切り落とした。

「次い!!」

下から剣妖目がけて妖魔がかまえてる。彼はためらいなしにそのうち1体の顔面目がけて黒竜を投げる。黒竜はその妖魔の額から脳天

を通過して貫けていた。

「ラスト……」

剣妖は刺さった一体に飛びつき、黒竜をつかむ。血が吹き出たらしいが、彼が見ているのは最後の1匹のほうだった。刺さった妖魔を足場に、剣妖は勢いづけて黒竜を引き抜くのと同時に最後の1匹を数回切りつけた。それなりの速さでもあった。最後の1匹を含め、剣妖は見事3体とまとめた。

「（さて……アイツは……！！）」

サイガも妖魔3体を倒していた。が、彼は倒れこんでいた。剣妖は急いでサイガのもとへ駆け寄った。

『こいつ……疲れているのでは……』

## 第11話 サイガと剣妖、明日に向けて

「!？」

朝、サイガは目が覚めた。彼はベッドの上に寝ていた。服が白いシヤツになっていた。

「な…オレは…」

「お！目え覚めたみてえだな。」

「てめえは!!」

彼の右手にはドアがあり、そのドアには剣妖がよりかかっていた。以前、サイガが会った時とは別の服装であった。破れて血まみれになった服は既に剣妖は捨てていた。

「ったく、お前大変だったんだぜ。」

「ここはどこだ!?なぜオレはここにいる!？」

サイガは訳が分からないようだ。また、少しばかり焦っているようにも見えた。それを見た剣妖はため息をつき、話を切り出した。

「ここはセリユアールの病院だ。お前は戦い終わったらバツタリ倒れちまって、オレがここまで運んできた。で、ここの医者に見せたら倒れた原因は、疲れと身体への負担だとよ。」

「オレはそんなもの感じねえぞ。」

「そついうやつもいるんだろうな…」

剣妖は苦笑いして小声でそんなことを言った。

「何か言ったか？」

「え、いや、別に…それよりもお前どこから来たんだよ。」

「南の方からだ。10日間歩きっぱなしでな。」

「そりや疲れるな…」

剣妖は旅をしたとはいっても3日目、それにきちんと寝てはいたのでサイガに比べれば全然疲れていないほうである。時計の針はもう正午を越していた。

「…切裂…だったな…」

「何だ？」

サイガが剣妖に声をかけた。目つきは真剣である。

「…てめえの旅にオレを同行させる。」

「な……」

剣妖は驚きを隠せなかった。であつた時に襲つてきたヤツが、丸1日たたないうちに仲間になるとも言つたらよほどの理由がない限り驚くのは当たり前だ。

「てめえもオレと同じ『契約者』だ。オレはてめえに勝負を仕掛けた…が、結果は引き分け…いや、てめえの勝ちだ。」

サイガが少し歯を食いしばっていた。

「だが、力なら断然お前が…」

「しかし、それ以外はてめえのほうが上回ってる。その上オレのその力までも利用するようなヤツだ。オレはお前を超える。そうでなきゃ気がすまん。ならそいつの側にいるのが一番だ。」

剣妖は目を閉じ、数分の間黙り込んだ。そして…

「分かった。なら、オレの目的達成にも協力してもらう。」

「…その目的とは…」

「インビンジ・ゲートの解放だ。そのためにオレはルクレイに行つて情報の収集をするつもりだ。お前が起きる前にあるものを受け取つてきた。」

サイガはインビンジ・ゲートと言われても何のことだかさっぱり分からないようである。剣妖は廊下のほうからキャリアケースを取り出した。

「こいつの中にはオレの父さんの知人が送つてくれたものが入っているな。」

そのキャリアケースは、剣妖がジョーカーに頼んでいたものだった。万が一、自分の身に何かがあつたときのためにセリユアラまで送つてもらつたのだった。

剣妖はそのキャリアケースを開けた。中にはかなり薄くコンパクトなパソコン、服、時計等のいろいろなものが入っていた。

「旅にそのケース持つてくのか…？」

サイガにつっこまれたが、

「いや、パソコンと服はまたルクレイまで送る。」

と、剣妖はその質問にあっさりと答えた。

「…ところで気になったんだが、てめえのいうその『インビンジ・ゲート』って何だ？」

「…お前、自分の契約した妖魔に聞けよ。」

「ティールガは熟睡中だ。」

剣妖はドアの外を確認した。幸い人は廊下を歩いていなかった。

「…この話は本来してはいけないんだが…インビンジ・ゲートはこの世界と魔界をつなぐ異次元トンネルみたいなものだ。ただ、出現したり消えたりする。しかもそのタイミングや時間は一切不明だし、どこに開くか分からねえんだ。でも、もしその中に入れたら…」

「魔界へ行けるといふ事が…」

その後、沈黙が続いた。

しばらくして、剣妖は外に出た。どの道、今日中にセリユアラを出発することは不可能であった。セリユアラはもともと昔はなかった国で、埋立地が国となっている。大きさもエイレクスの5分の1に達するかどうかだ。剣妖がサイガを運んだ病院は海辺に近く、剣妖の目の先には太平洋が広がっていた。

『で、こんなとこで何をするんだ？少し店とかあるところまでは遠いぞ。』

「（分かっている。だからちよつとやつとくことがある。）」

剣妖は黒竜を鞘から抜いた。また、彼はキャリアケースの中から箱を取り出した。

『何だそれ？』

「剣を研ぐ道具が入っている。こんな時しかできねえし、この前でちよつと妖魔の血がついちまったからな…」

『（あの男も爪研いでんのかなあ…というか刀って別に頻繁に磨かなくてもいいと思うが…）』

一方、サイガはというと

「グ…（体が思うように動かねえな…やっぱり疲れてんのかオレ…）」

「そうなんじゃないのか？」

サイガの脳裏に声が響いた。

「（テイルガ！？てめえいつの間に…）」

「ついさっき起きたばかりだ…お前がああ男についていくのか…」

「悪いかよ。」

「いや、不思議だと思ってな。」

こうして、また日が沈んでいった…

## 第12話 インビンジ・ゲートの軌跡

剣妖が黒竜を研ぎ終わり、サイガの病室へと戻ってきたのはとつくに日が沈み、満月が空で輝いている深夜であった。

「（今日が満月だからあの妖魔が出てきたのかな…）」

そんなことを思いつつ、彼はサイガのいる病室に入る。

入った瞬間剣妖は呆然とした。サイガがいなかったのだ。

「アイツ…」

剣妖はどうするか戸惑ったが、一つの案が浮かんだ。彼はその場でじっとし、感覚を研ぎ澄ました。サイガの妖気を探ったのだ。

「（いた！）」

剣妖は病室を飛び出して妖気の感じるほうへ向かった。と、一つの部屋に明かりがついていた。その場所は…

「（せ…洗濯室！？）」

一体何の用があったのか疑問に感じつつも、剣妖は洗濯室の中に入る。

「き、切裂！」

部屋の中にサイガはいた。手には血がついたサイガが着ていた服を持っていた。

「お前…それだけのために…」

「わ…悪りいかよ…！」

「…服ならオレの荷物の中に数着あるぞ。まだ送ってねえし、旅についてくんならいくらでも貸してやるよ。こっちだ。」

サイガは無口になりつつも剣妖についていき、病院の外に出た。

「これとか案外に合うんじゃないか？」

剣妖はそう言つてサイガに一着服をさし出す。暗い中だったのでよく色などは分からなそうだったが、サイガはその服を受け取った。

「着ればいい。」

「えーっと…あと他に必要そうなものは…」



『特になさそうだが食料はどうするんだ？この病院でも何も食べていなかったろう？』

「（ああ、それなら心配なくていいぜ。一応これは持つてくから…）」

剣妖は自分の胸のポケットから何かの小さなケースを取り出す。中から少しカラカラという音が聞こえた。

『何だそれ？』

「（来る前に持ってきたタブレット。これ一粒で人にしたら2日分のビタミンとかエネルギーとかそこら辺の栄養は補給できるんだと…）」

『（…体にあまり良くなさそうな気がするが…）ところで…』

「着替え終わったぞ。」

剣妖が振り返るとサイガが既に上下着替えて立っていた。

「早っ！！」

思わず剣妖も驚いたようだ。

「で、どうするんだ？」

サイガは剣妖の反応なんか無視して話を進めようとする。

「（切り替え早ええよ）…サイガ、お前持つものは？」

「そんなものない。爪はベルトにつけているからな。」

サイガはずっと爪も持っていたらしく、ベルトの後ろに爪を二つ、金属のバツクルのようなものでつけていた。

「なら…」

「もう出る…のか。」

「ああ。」

「そうか、いろいろと迷惑をかけるかも知れねえが、オレは切裂…てめえを超えるためにてめえについていくんだ…絶対に…」

サイガの言葉には力が入っていた。周りが良く見えなくても、サイガの何かすごい執念的なものを感じた剣妖は少しだけひいた。

「（…なんか少し上から目線の気もするが）わ、分かってる。とにかく、先には進むぞ。オレにはオレの目的がある。お前にもお前の

目的がある。」

『剣妖、ところであそこにはいつ行くんだ？』

「（あ……うん……今、行くか。）」

『てきとうだな……』

「何してんだ…切裂…」

サイガがすぐく不自然そうな目で剣妖を見ている。一人で急に黙り込んで、うなずいたりしているのを見れば、不自然に感じるのも当たり前だ。

「え、あ、いや、別に…それより、一応寄っておきたいところがあるんだが…」

「…好きにしる。時間は全部てめえに任せる。」

2人がやってきたのは病院からさほど遠くはない山だった。

「（こんなところに、一体何の用が…）」

サイガはそんなことを考えつつも剣妖のあとについてきた。結局、何なのかはいまだに分かっていないようだ。

「ここの中だ。」

「何もねえじゃねえか。」

剣妖の指差す先には何もなかった。しかし、彼は黒竜を抜き、そこに向かっていった。

「お、おい！？何する気だよ。」

「ま、見てろつて。」

剣妖は黒竜をかまえ、その先ほど指差した場所を切った。

ガラガラガラ…

「な…」

その場所から洞窟が現れた。こんなに暗かったら普通の洞窟であれば分かるはずはない。が、この洞窟はサイガにも、剣妖が切ったところから岩が崩れ落ちる瞬間から分かっていた。中から薄い紫に近い色の光が漏れたからだ。

2人はその中に入っていた。

「やっぱし、思ったとおりだ。」

「な…何だこれ…」

彼らの前には紫色に輝くクリスタルの結晶のようなものが洞窟の周りに敷き詰められているような景色が広がっていた。

「さ、最初からこれを知って…」

サイガは驚きを隠せなかった。だいたい、こんなところがあるのに何一つ傷がクリスタルの結晶のようなものについていないというのがおかしい。

「ああ、だが見たのはオレも初めてだ。」

「？どういうことだ…」

「さっきの荷物、あれを送ってくれたオレの父さんの知人から聞いたんだ。ここはインビンジ・

ゲートだったっていうことをな。このクリスタルみたいなのは妖蓄ようちゅう鉱こうって言うらしい。」

剣妖はそう言いながら壁についている妖蓄鉱をとった。意外にもろく、壁から妖蓄鉱はすぐにはがれた。

「とっていいのか？」

そう言つてサイガも自分の近くの妖蓄鉱をとる。

「別にいいと思うが、価値はないぜ。」

剣妖は持っていた妖蓄鉱を投げ捨てた。地についた瞬間粉々に砕け散った。

「（…にしても何でこんなのができるんだろうな）」

『魔界の気は、一定量以上の窒素と二酸化炭素の間で化学変化を起こし、クリスタルのように結晶化する。インビンジ・ゲートから魔界の気漏れることによりこうなる。といっても、こっちの世界でいう一週間ほどで消えてしまうがな。もっとも、あの剣妖とかいう男は分かっているようだがな。』

「（…急に説明しに出てくんなよ）」

サイガも妖蓄鉱を捨てる。

「で、ここに用はもうないだろ？」

「ん、ああ。一応妖蓄鉱を見ときたかったけど。」「  
2人は洞窟から外に出て次の街のルクレイにむかうことにした。

### 第13話 迷いからの戦い

剣妖とサイガがセリユアーラをたった1日で出てきてから、もう3日もたった。歩いている途中で…

「…なあ、切裂…」

「な、なんだ…」

剣妖はギクリとする。

「もう3日も経つぞ。いいかげんこの薄気味悪い森をぬけてもいいんじゃないか？」

サイガの声は低かった。セリユアーラからルクレイまでは1000キロほど、ルクレイに着くのはまだまだだが、セリユアーラから続いている森はせいぜい100キロくらいだ。そのくらいの距離なら3日もあれば普通はぬけているはず。が、剣妖たちはぬけていなかった。それらから分かることは一つである。

「迷っただろ」

サイガは足を止め、はっきりと言った。彼の前を歩いていた剣妖も、言われて立ち止まった。

「お、怒って…る？」

『（そりゃ怒るだろ…ま、今はオレは黙っとくか）』

恐る恐る、後ろを振り向きながら剣妖はサイガに問いかける。少々彼の顔には苦笑いが浮かんでいた。

「あたりめえだろおおお！！」

サイガの叫びは森の中で響いた。

「何でこうなんだよ！？そもそもお前エイレクスから歩いてセリユアーラまで来たんだろ！？セリユアーラは確かこの森の真中にできた国だ。だったらもうぬけ出せてるだろうがあ！！」

「あ、いやあ…何で…かな？ま、まあそんな事は置いといてさ…」

剣妖は少し笑みを浮かべ、軽く受け流そうとした。サイガの睨みは

先ほどのものよりも怒りが込められていたのは見て分かる。

「チッ！」

サイガは力を入れてかなり強く拳を握っていた。勝手にしろと言われていた剣妖にとつてはいい迷惑である。

「（う…）…あ、あれ…！」

剣妖はとっさに自分の右後ろを指差す。そこは、ただの岩場のようだった。微笑しながらサイガと目を合わせないようにしていたため、何かがそこに見えたようであった。が、

「気をそらそうっていうのか…！？」

UFOと同じようなものとサイガは思ったようだ。現に、一瞬だけそこを見てみたが、彼の目には何も入らなかった。

「いやいやいや、違うっつーの、ほら、あの…ほらあな洞穴…？」

「あん？」

サイガが剣妖の指差すほうを目を凝らしてよく見ると、確かにその岩場の中に洞穴があった。しかも、あきらかに自然的なものではなかった。

「……入ってみるか、切裂」

「ああ」

二人はその洞穴の前へとやってきた。どこかへ突き抜けているわけではないらしく、外から見れば、中は完全に真っ暗だった。

『妖気を感じる』

「（オレも同じ事を考えていた…この奥に、妖魔がいる）」

『アイツは…』

「（とつくに気づいているはずだ）サイガ、中に入るぞ」

剣妖はサイガへと呼びかける。サイガの目は洞穴の奥をじっと見ていた。

「サ、サイガ…何か見えてんのか？」

「え、いや、そういうわけじゃねえ…ただ、この奥には…」

サイガは妖気以外の何か別のものを感じているようだった。が、こ

ここまで来たというのに引き返すなど意味がない。奥に何があるのかは、二人とも知らず、だからこそ知りたかった。

「心配ない、それに、入んなきゃ何にも分かりやしねえよ…行くぜ」  
「分かった…！」

暗闇の中へと剣妖とサイガは走りながら入っていった。

「よく見えねえな…チツ、何か妙にじめじめしてやがる」

「それでも一本しか進む道はないみたいだ…（だからこそ奇妙なんだがな…）」

穴に入ってから5分程経った。

ピチャ…

「（水…）サイガ…」

「ああ、見えやしねえが、ここは開けてるな…」

2人は小声で話した。そしてゆつくりと前に歩き出す。

「?…（今、何か足に違和感が…）」

「切裂…！」

「!？」

サイガが剣妖の服の襟をつかみ、左に引っ張った。

「な、なにすんだ…」

剣妖はその時に気づいた。自分のほおが、すじが入ったように切れていたからだ。そして彼がサイガの後ろを見ると、かすかだが何か細いものが壁となっている箇所に刺さっていた。

「…トラップってわけか…」

「残念ながら違うな」

剣妖のその声に応えるかのように何者かの声が聞こえてきた。

「!？」

「クク…今見せてやるよ」

その直後、剣妖たちのいる場所より少し先の上が崩れて光がさしてきた。そしてその先にいたのは…

「てめえ、何者だ!？」

手足計8本をもつ人と同じサイズの蜘蛛くものような妖魔だった。

「ククク、名乗る必用もないと思うぜ…」

「何…」

剣妖は黒竜に手をかける。

「お前たちはこれからオレの栄養源になってもらうんだからな！」

「ハッ、そんなことになるオレだと…」

剣妖が黒竜を抜きかけたときに背後からサイガが飛び出していった。  
「相当自信過剰だな！」

「あ、おい、サイガ！」

剣妖を無視してサイガは爪で蜘蛛の妖魔に襲い掛かった。しかし、  
「ぐ…な、何だ」

遠くからよく剣妖には見えなかったが、サイガの両腕が動いていない。まるで何かに縛られて止められているようだった。

「（…まさかアイツ…）」

剣妖はすかさず黒竜を片手にサイガとその妖魔のほうへと走り寄る。  
「来るな切裂！！」

ピッ…

「（やはりか…）」

剣妖も動けなくなってしまった。手首、足首が完全に何かに結び付けられたように止められているような感覚が剣妖にはある。

「まさか自らかかってきてくれるとはな…」

蜘蛛の妖魔は見下すような眼で2人を見ている。あきらかに余裕の表情を見せていた。しかし、剣妖も忠告をつけて、それでもなおかかってくるほどのバ力ではない。

「オレの黒竜をなめるなよ…」

「…何…」

剣妖は小指で黒竜の柄頭つかがしら（柄こと持ち手がわの先端のこと）をはじいた。黒竜が宙を回転しながら落ちてくる。

「首も捕らえとけばよかったのにな！」

剣妖は口で黒竜の柄を受け取った。そして黒竜で左手首から右手首



まで刃先をわたらせる。すると、「プツン」という音がして、剣妖の両手はガクツと落ちた。

「予想は当たってたみてえだな……」

『（もし違ってたらどうしようもなかっただろうが……）』

剣妖は右手に黒竜を持ち替え、両足の周りを手のときのように刃先をわたらせた。そのときにも手のときと同じような音がした。

「ほう……単純なバカではなかったか……」

「……（単純なバカ……それってオレのことかああああ……！）」

サイガはそのまま動けないでいた。剣妖も蜘蛛の妖魔もサイガのことは眼に入っていないかった。

## 第14話 蜘蛛妖魔との戦い

『気をつけるよ、剣妖』

「（ああ、あいつがまだどこかにトラップはってるかしんねえかな）」

剣妖は黒竜をかまえる、が、

「…どうした？かかってこないのか？」

「……」

剣妖はその体勢のままずっと立っている

「（切裂のやつ…動けるようにはなったものの、やはり自分からは出て行かないか…）」

「フツ…まさかこつちが向かっていくのを待っているのか？どうせ、その足取りをたどって来ようとも考えているんだろ？だが…」  
そう言うと、蜘蛛の妖魔は少し身を引き、剣妖にフツと息を吹きかけた。しかし、実際にはただ息を吹きかけたわけではない。だが、剣妖にもそれは分かった、いや分かっていた。

「どうせ、そう来ると思ったぜ…」

剣妖は体を左に少しだけ寄せた。しかし、彼の右の頬にはスツと浅い切り傷が入った。

「ハッ、お前みたいな蜘蛛野郎なら、そうやって糸を武器のようにして、飛ばしてくることくらい検討がついてたさ、で…」

「ったく…こうするなら早めに俺に言つといてくれっつーの…」

剣妖の後ろからサイガの声がした。サイガは手が動くようになって、爪で足にかけられた蜘蛛の糸を切っているようだ。剣妖は初めからサイガにからまっていた蜘蛛の糸をほどもりだったのだ。  
「悪いいな、『敵を欺くにはまず味方から』って言うだろ？」

『おまえな…』

「フツ…だが…二人になったとしてもこちらから見れば変わりはない…」

確かに二人になったとはいえ、あまり意味がない。動けばまた妖魔の蜘蛛の糸に引っかかってしまうだけだ。

「よし、サイガ」

剣妖は迷いなくサイガに話しかける。

「あ？」

グッ

『おい…剣妖、お前…まさか…』

剣妖はサイガの裾をつかみ、そのまま彼の前へと引き出した。

「うおっ！！？切裂…てめえ…！！」

無論、サイガは再び蜘蛛の糸にからまれて動けなくなってしまう。しかも、罨などではなかったため、乱雑にからまり、さつきよりひどい状態だ。幸い、転がるようになったので、サイガの体に負傷はなかった。

「上出来っ！」

剣妖はサイガに対しガッツポーズをした。

「何が『上出来っ！』だ！」

「ほう…仲間を助けたのはこうするためか…？」

蜘蛛の妖魔の声に剣妖は黒竜を再び素早くかまえた。

「ん？ああ…ま、そんなところ…かな（ホントは今考え付いたんだけどな）」

「（あいつ…）」

「さてと…お前、強いんだろ？」

剣妖の口に少し笑みが浮かぶ。余裕…とはまた違うようだ…

「どうか、お前の基準で変わるが…」

剣妖は片手に持った黒竜で蜘蛛の妖魔を指した。

「オレにとつての強さの基準なんかねえ、だが…やっぱ、お前実力はある気がする、それにトラップみたいなのもあつたけど、べつに卑怯でもなさそうだ、なんとなくだけど分かる、どうやらオレは、一回でもいいから、今の自分を確かめられるような妖魔と戦ってみたかったみてえなんだよ」

「手加減はできないぞ」

そう言うと、蜘蛛の妖魔は口から糸を出し、そいつを手で掴んで長い棒のようなものにした。薄暗い光沢があるように剣妖には見えなかった。

「糸だつてまとめて妖気を送れば剣になる、そして…」  
キンッ

蜘蛛の妖魔がその剣を振ると、刃先が伸び、剣妖に向かってきたのだった。が、すかさず剣妖も黒竜で受け止めた。

「ぐっ…（こ、こいつの剣…こんな形で奇妙な動きする上に、ここまで力が入っているなんてな…）」

剣妖は力を入れて蜘蛛の妖魔の剣をはじき返す。妖魔の剣はスルスルとまた戻っていった。

「おもしれえな、それ」

「お前が勝つたらくれてやってもいい、ただし…」

『剣妖！』

「！！！」

キンッ

再び剣が交差する。剣妖は瞬時に反応できた。妖魔の剣が彼の背後から向かって来たのだった。

「ほう、よく気付いたな」

「けっ、このくらいできなきゃ剣なんて持っていねえよ…剣は貰うからな、ついでに勝ったら道も教えてくれよ」

剣妖は力を入れ、その瞬間、彼は一瞬のスキに蜘蛛の妖魔の前に駆け寄った。

「！（速い…まさか…）グ…だが甘い！」

蜘蛛の妖魔も自分の刃先の伸びた剣を横に引いた。だが、剣妖はすぐに黒竜で剣を止めた。そして…

「なかなかやる…が、甘いのは…てめえの方だ！」

すぐさま剣妖は、蜘蛛の妖魔の足を蹴り、そのスキに後ろに回りこんだ。そして…

「もらった！」

パシィ…

剣妖は黒竜で蜘蛛の妖魔の剣をはじいた。そしてすぐに黒竜は蜘蛛の妖魔の首にあてられた。

「フン、お前の勝ちだったか」

剣妖は黒竜を鞘さやに戻して蜘蛛の妖魔の正面に立つ。

「そうでもねえよ、オレだって、最初のお前の不意打ちは回避できなかったかもしれないだし、な？」

「…あのくらいは気づけるようになれば、それにあたかも気づいたようない方をして…」

剣妖はセイズの言葉に苦笑する。それを見ていた蜘蛛の妖魔は気づいた。

「！そうか、お前は契約者だったのか」

「あ…そういう言っていないかったな」

剣妖はそう言って、さっきはじいた蜘蛛の妖魔の剣の前に立った。

「とりあえずオレの勝ちなんだろう？つーわけでこの剣貰ってくな」  
そう言って、彼は蜘蛛の妖魔が使っていた剣を手取る。

「勝ったのはお前だ、好きにしろ」

剣妖は少し笑みを浮かべた。

「…おい、後ろ」

「（ん？何だよセイズ…）」

ふと振り返ると、そこには相当憎しみが感じられる目で剣妖を見るサイガが、いまだに蜘蛛の糸にからまっていた。

「あ…」

「切裂…もう解いてもいいはずだよな…」

「あ…ああ…そ、そうだな」

剣妖はサイガのほうに駆け寄り、と

「そういえば…」

唐突に蜘蛛の妖魔が話し始めた。

「何だ？」

剣妖は、その声を聞いてまた立ち止まった。

「（切裂いいいいいい！！）」

『サイガ…落ち着けて』

その様子を見ていた蜘蛛の妖魔は

「別にそう大した話ではない、そいつの糸を解きながらでもいい」と言った。蜘蛛の妖魔は気づかったつもりだが、サイガには少しイラッときたようだった。

剣妖がサイガの糸を解き始めるのを見て、蜘蛛の妖魔は話を始めた。  
「実はここ最近、この付近にいる人を襲った妖魔が瀕死状態になっているみたいでな…」

「お前がやったんじゃないの？サイガ…」

「あ？オレだったら瀕死どころじゃなく殺している、それにこっちまでオレは来てはいないからな」

様子を見て、蜘蛛の妖魔の話が再び始まった。

「別にその妖魔をどうか言うわけではない、人を襲ってやられてるんだからな」

「で、何が…」

「…ただ気をつけろというだけだ、ま、もしかしたらお前と同じ契約者なのかもな」

『契約者…もしかしたら何かあるのかもな…』

そうこうしながら蜘蛛の糸を解いていると、いつの間にか終わってた。

剣妖とサイガは洞窟の前まで来ていた。蜘蛛の妖魔も後ろにいる。

「初めにお前が言っていたが、本当に卑怯で醜悪な妖魔もいる、そういうやつには気をつけろよ」

「案外いいやつだな、お前」

「フン、戦ってすつきりしただけだ」

「行くぞ、切裂、道も聞いたことだしな」

サイガが先に洞窟から出る。

「じゃあな！剣、大切にすつからよ」  
剣妖もサイガに続いて後から出ていった。

## 第15話 抜け出した…が

洞窟を出た剣妖とサイガは再び森の中を歩いていた。日が沈みかけ、辺りは既に薄暗くなっていた。

「…あいつの行っていた方向だと…こっちであつてるんだよね？」

『そうなるな、だが…もうそろそろ森は抜けてもいい頃じゃないかと思っんだが…』

洞窟を出てから剣妖とサイガはもう5～6時間くらい歩いている。

『…それと、オレと話すときは声に出さなくていいと何度言えば…』

「分かつてるって（ただ…な…）」

剣妖はチラツと目を後ろのサイガに向ける。

『お前…』

「（だってよ、あんだだけ散々殴られたんだぜ？それなのによ…）」

剣妖の頬などは少し青くなっているところがあった。

『お前…あの洞窟に入る前のことを少しでも考えてんのか…？』

「（あ…）」

そう、既にサイガの怒りがかつていた剣妖がこういう目にあつてるのはおかしいことではない。

結局、剣妖はその他に何も言う事ができなくなり、二人とも無言で歩いていた。しかし、さすがにもう夜になってしまい、辺りもかすかに明るさがある程度になってしまった。

「な、なあサイガ、今日はもうこのくらいで休もうぜ…」

話しかけたのは剣妖のほうからであった。

「…分かった」

「フウ…」

剣妖はサイガの了承に少し落ち着いたようである。そして持っていたカバンをおろす。ちなみに、食料などというものはない。というか、持ってきたものを食い尽くしてしまったのだ。原因はサイ



ガで、病院のときも何も食べていなかったことなどが原因であろう。  
しばらくして、剣妖は既に寝たあと。が、サイガはまだ横になって  
起きていた。

『サイガ、お前はあの剣妖という男をどう思っているんだ…』

「（あ…？…ム力ついてんに決まってるんだろ）」

『いや、そういう訳では…』

「……」

翌朝

剣妖とサイガは早朝から出発した。しかしながら、サイガは寝付け  
なかったようで、すつつごく眠そうだ。また、出発してから、そ  
う時間も経たずに森から広い場所へ出た。

「なんか…この森をさっさと脱出するために朝早くに出てきたって  
のに…」

『ま、そういうこともあるさ』

「…（そういえば、あの切裂と戦った妖魔…森に妖魔がいると、い  
や契約者か？…）」

と、いつに無く真剣な眼差しで物事を考えているサイガを見て、剣  
妖は不自然に思った顔をしている。まあ、そんなことを言えばまた  
機嫌をそこねるかもしれないと考えたのか、剣妖は

「それにしても、大草原って感じだなこりゃ…」

わざとらしくも見えるが、手を額にあてて、遠くを見るようなしぐ  
さもしていた。が、本当に草原が広がっているので、サイガは特に  
気にはならなかったようだ。

「…切裂、あの蜘蛛の妖魔がお前に言っていたこと…結局出会いは  
しなかったが…」

「（あ、そのこと考えてたのか）ああ、あのことが…確かに気には  
なるがな…妖魔だったら普通ってわけじゃねえが別におかしくはな

い話しだしな…」

「ハン、それもそうだな、まずはルクレイに向かうんだろ？」

そう、迷ったりいろいろあったが、一番の目的はルクレイに向かうこと。今、ようやく森を抜けたということは、とりあえずルクレイに一步近づいたということだ。

「しっかし…やっぱし遠いだろ…」

剣妖が肩を落としてため息をつく。

『今からそんなこと言ってどうするんだ…』

「先に進むぞ、遠くても進まねえといけねえんだろ」

ということと再び二人は進む。草原なので、森の中を歩くよりは遙かに障害などはない。しかし、剣妖もサイガも疲れはあるためか、走らずに歩いている。

そうして進んでいても、やはり遠いものは遠い。歩きで900キロはさすがに1日で突破できるものではない。

「（にしても本当にあの妖魔が言っていたことは本当なんだろうか…）」

『まあ、本当だと思うがな』

と、そのとき

「！！サイガ！」

「ああ、切裂！妖気だ！」

2人とも妖気を感じ取っていた。が、辺りを見回すもこれといって強く感じる場所はない。

「一体どこにいやがんだ…」

ここで剣妖にはある案が浮かんだ。

「…こういうときってのは…いや、まさかな」

そう言って剣妖が見たのは空だ。剣妖のまさかはあたっていた。空にはあきらかに普通ではない鳥が飛んでいた。

「んな…あのデカさ…怪鳥じゃねえか…」

「軽く体は4メートルくらいはあるな…！！？」

あくまで体、翼は合わせて10メートルはある。

「お…おい切れ、これって妖気高まっているよな…」

と、その瞬間、そのサイガいわく「怪鳥」は空中から剣妖たちのほうに向かつて猛スピードで降下してくる。

「チッ（こいつがその妖魔なのか…?）」

剣妖はすぐさま黒竜に手をかける。また、サイガも腰から爪をはずして両手につける。

しかし、それは無意味だった。

「うあっ…!」

怪鳥が地から5メートルくらい離れたところに来た瞬間の風圧で剣妖とサイガは吹き飛ばされて倒れこんでしまったのだ。

「サイガ…!」

怪鳥は、低空飛行でサイガの方へと足で襲い掛かる。

「くっ…!」

サイガは怪鳥の襲い掛かってきた足を両方の爪で受け止める。

「こっ…この野郎…」

怪鳥の爪はサイガの爪をギリギリと絞め上げていく。

『剣妖!! あいつからもらった剣を!』

「（蜘蛛の糸でできてる剣のことか!）」

剣妖は黒竜から手を離し、ベルトにくくりつけてあった蜘蛛の糸で作られた剣を抜き、両手で構える。

「（…ってどうすればいいんだよ!?）」

『あいつはさりげなく妖気を送っていた』

「（つまり手に神経を集中するとかそういう感じか!よし…）」

剣妖は右手だけに剣を持ち替え、

「（狙うのはあいつの翼…!）行けえ…!」

思いっきり剣を振った。すると、その剣先がかなりの勢いで伸びていき、怪鳥の右翼に巻きついた。

「ぐ…（力仕事は苦手なんだああ…!）」

剣妖は再び両手に蜘蛛の糸の剣を持ち替えて、引く。

「！！（クソッ！）」

サイガはその隙に抜け出し、怪鳥は空中へと上がっていく。剣妖はまずいと思ったのか手の力を抜き、蜘蛛の糸の剣は元の長さに戻った。

「やっぱりあいつが忠告された奴か…」

剣妖は上空を飛ぶ怪鳥を見て、そうつぶやいた。

「いや、違う…」

「！？…どういうことだ、サイガ…？」

「確実に奴には『殺気』がある、あんな殺気がある野郎が、殺さないでいるなんて考えられねえよ…」

攻撃を受け止めていたサイガには分かっていたようだった。剣妖もそれに納得したようだ。

『確かに…蜘蛛の妖魔は人を襲った妖魔とも言っていたしな』

「（まあ…じゃあ、何であいつは生きてんのか…って思うけどな…）」

「  
剣妖は肩を落とした。二人とも空を見上げる。と、どうやら怪鳥も彼らの方を見ているようだ。」

「こりゃあターゲットにされたな…」

「ケツ…空飛んでっからそう簡単には攻撃できねえ…か…」  
と、その時

「！？（まさか…）」

「！？妖気がまだ他に…」

二人とも後ろの茂みから妖気を感じた、そして振り向くと…  
ガサッ

「ようやく見つけたわ！って…あれ…ど、どちら…様…？」

## 第16話 草原の中、少女の空

剣妖とサイガが後ろを向くと、そこには一人の女がいた。金髪で、緑色の目、服はベージュのワンピースのようなものだった。そして、彼らを感じた妖気はその女が放っていたものだった。

「あ…あなた達は…」

「どうやら…お前がこちらの妖魔を倒していたみたいだな（…なかなかいい女の子じゃん）」

剣妖はその女性をじつと見る。外見的には剣妖やサイガと同年齢くらいに見える。とはいえ、事情や何かがなければこんなところに人がいるはずがない。

「あなた達も…妖気を持っているの…？」

「やっぱり…お前も契約…」

サイガがそう言いかけたとき、3人の周りにまた風が吹いた。怪鳥が、再度上空から襲い掛かってきたのだ。

「（…）…来るわ！」

「ちよつと待て、お前は…ぐっ…」

剣妖は黒竜を今度は抜き、右手で持って構える。が、その女性に声をかける途中で風に吹き飛ばされそうになった。

「わ、私の名前は楓香…深理<sup>しんりふつか</sup>楓香よ、詳しい自己紹介はあと、今は

…」

一応、3人とも吹き飛ばされることはなかった。既に頭上には怪鳥がいる。

「分かった…」

「チッ…こいつの腹でも裂かなきゃ気が済まねえ!!」

サイガはさつき襲われていたからか、怒りを表して怪鳥に飛び掛つていった。

「サイガ！（あの野郎!）」

剣妖も怪鳥に切り掛かろうと怪鳥に向かっていくが、怪鳥は勢いよ

く羽ばたきだして、また上空へと戻っていつてしまった。

「くっ！」

『また飛ばされるぞ！』

しかも、さすがにそのときに起きた風には耐えられなかったため、剣妖とサイガはまたも飛ばされて地面に叩きつけられた。

「あの鳥めえっ……！」

「！？…あいつがいない…」

そう、あの楓香という女性がいなかったのだ。剣妖は辺りを見回したが、やはりいなかった。しかしどういうわけか、小さくはなっていたが彼女の妖気を感じていたのだ。

「なあ…切裂…たぶんいたぞ…」

その様子を見ていたサイガが、剣妖に声をかけた。

「！？どこに…」

剣妖がサイガの方に目を向けると、サイガは人差し指を立てていた。

「空…！？」

剣妖が空を見上げると、空には怪鳥の他にそばにひとつだけ人影が見えた。だが、少し普通の人影とは違うようにも見えた。

『剣妖、おそらくあの人影が…』

「間違いないね…だろうな、あいつが…たぶんあの女だ…ただ、あれは本当に…」

剣妖がそういうのも無理はない。空を飛ぶ人影は、空中に浮いているのではなく、明らかに人にはないもの『翼』を背に飛んでいたからだ。だが、剣妖とサイガには同じ契約者であっても、自らの体に何らかの変化が起きてはいない。

「あいつは一体何なんだよ…契約者とかじゃなかったのか…？」

『…いや、あいつは契約者だ…』というか、むしろそうでなければつじつまが合わない』

「（？…と、とにかく契約者ではあるのか…）でも…オレらどうにもできないな…」

下で剣妖とサイガが何もできないでいる中、上空では楓香と怪鳥が対峙していた。

「今までずっと探してたのよ…ようやく見つけたわ…」

楓香は羽を羽ばたかせ、怪鳥に高スピードで近づき、すぐさまその頭に蹴りを喰らわせた。が、どうやら怪鳥にはダメージになっていないようだった。彼女は、それを見てすぐに後方へと下がった。

「!？」

すると、その直後の隙について怪鳥が楓香に向かって口を開き、先ほどの楓香よりも速いスピードで向かってきた。

「くうっ…」

楓香は空中で体勢を変え、オーバーヘッドキックのように怪鳥の下のを蹴り上げた。しかし、そのためかバランスが崩れてしまい、地上から15メートルほどのところまで落ちてしまってからようやく体勢を整えた。

「おい…（やつぱりな…）」

「え…?」

楓香が振り向くと、そこにいたのは剣妖とサイガであった。

「あ…」

「俺がサポートしてやるよ」

「（クッ…オレはまたすることがねえのかよ…）」

サイガが剣妖を睨んでいるが、視線には気づいたものの、かまわずに剣妖は楓香に向かって話しを続ける。

「じ、事情がありそうなのは分かった、が、このままじゃ…お前だけはどうにかできると思ってるか？」

剣妖はついさっきの怪鳥と楓香の戦いを見ていて、圧倒的にパワーで負けている上にバランスが取れなければ空で戦っていても意味がないということを悟れたようだ。

「…でもあなたたちは…」

「空飛べねえってか?安心しな、オレにはこれがある」

そういつて剣妖はあの蜘蛛の系の剣を取り出して振り、すぐ近くに

あつた木の上のほうまで伸ばし、そこに巻きつけた。

『…お前一瞬にして使い慣れていないか？』

「（まあざつとこんなものさ、よつと）な？」

剣妖はすぐに剣の伸びを戻した。と、上から楓香が降りてきた。近くで見ると、羽は片翼で2メートルはあり、いがいに大きかった。

「その剣すごいわね…」

楓香は剣妖の持っていた蜘蛛の糸の剣を見ていた。そんなものを見たこともないような目で見ていたので、やはりあの蜘蛛の妖魔との関わりはないことがはっきりした。

「（いやどう考えてもお前の羽の方がすごい）…ってかやっぱりお前も契約者なんだな…」

「そうよ、といってもあいつの力はすごいわね…今までの奴らみたいに向こうの攻撃を利用してやるなんて結構無理があるわね…」

と、途中から独り言になって行きながらも、楓香はいろいろ考えているようだった。

そんな中上からは怪鳥が、また3人に迫ろうとしていた。



## 第17話 勝利の頼みはサイガ

「とにかく、オレのこの剣でアイツを止め…」

剣妖が考えながらブツブツ言っている楓香に話を切り出した、と思っただけで声が出なくなってる。

「？何…」

「い…いや…あれ…」

剣妖はさっき話を切り出すときに怪鳥の方を指差した。が、そこで彼はとんでもないことに気づいてた。彼の指差す先には何もいなく、その真下へと怪鳥が降下し、かなりのスピードでこっちに向かって来ているのだった。無論、楓香とサイガも気づいた。

『どうするんだ剣妖！！』

「（いや、もうやるしかないだろ）サイガ！お前はアイツの真正面に立て！」

「なっ…てめ、オレに指図すんな！大体、それって死ねって意味じゃねえか！！」

まあ、確かにサイガの言っていることが正しい。とはいえ、簡単なから剣妖にも策がある程度は浮かんでいる。

「違う！オレのこの…えーっと…ス、スパイダ・セイバーであいつの動きは封じる！」

この時、剣妖は何気にあの蜘蛛の妖魔から貰った剣に

「スパイダ・セイバー」という名前を付けた。しかも、即席であつ

た。ちなみに、蜘蛛妖魔が使っていたものは「刃」があつたが、剣妖が貰ったこっちの剣は「刃」がない。それは使いやすさと同時に、敵を切れないというデメリットであるが、既に黒竜を持つ剣妖にとっては支障はなかった。

「…それでもあのスピードじゃ止められねえ！」

というか、それ以前に勢いよく引かれて剣が切れてしまつてあろう。「だから、その、ふ…ふう…」

「楓香よ、私に後ろから更にあの鳥を押さえてもらうつてわけね…  
剣妖」

剣妖は覚えていなかったようだが、楓香は剣妖の名前をしっかりと覚えていた。

「で、止めたらあとはどうすつかくらいは分かるよな…オレらは手が空いていない…」

「…！ああ、分かった…じゃあ早速頼むぜ！」

サイガは剣妖の言葉を聞いたあと、考え付いたことにニヤリと笑みを浮かべ、今も口元が笑っていた。

その間、楓香は急いで上昇し、怪鳥の後ろへと回り込もうとしていた。現在、サイガがさっきの場所に一人で棒立ちし、剣妖はその少し前にいる。そして、剣妖の目の先には楓香がいて、彼女はサイガの方向に向かって飛んできている怪鳥の後ろをとっていた。どうやら怪鳥はしつこい性格のようで、サイガを狩ることができなかったせいか、またターゲットにしているようだった。が、それが剣妖たちにとっては好都合であることに違いはない。

怪鳥が剣妖から少しはなれたところに来た時に、彼らも動いた。

「てい…！」

まずは楓香が怪鳥の尾をつかみ、全力で羽ばたいて引く。しかし、やはりそれだけではどうにもならない。すかさず剣妖がスパイダー・セイバーを伸ばして怪鳥の首に巻きつけ、更にその先を自分のもとに戻し、左手でつかんだ。

「くっ…！」

剣妖も楓香もかなり力を入れて踏ん張っているが、実はそこまで怪鳥のスピードは下がっていない。二人とも怪鳥に引きずられているとなると、やはりサイガだ。

「（…確かにスピードは落ちてっけど…これをどうしろと…）」  
剣術であればそれこそ「居合い」などの対処法があるのであろう。

ただ、それをサイガの持つ爪でやるのは結構無理がある話だ。しかし、もう彼の目の前には怪鳥が迫ってきている。

「こ…この野郎!!」

そう言ったのは剣妖だ。そして同時にザシュツと何かが切れた音がした。その瞬間、怪鳥が叫び、サイガの目の前で状態が起き上がった。見ると怪鳥の右翼の付け根に大きく切り傷がついている。実は、剣妖がこのままではまずいと思い、スパイダ・セイバーの持ち手よりと先端を縮めて怪鳥に急速接近し、左手で普通とは違った抜き方で剣を抜き、それこそ「居合い」のような感じで怪鳥の右翼の付け根に切り傷を負わせたのだ。ただ、さすがにサイガもただのチャンスだとして今は考えられていない。

「!（今だ）つあらああ!!!!」

サイガはその隙にかけ、怪鳥の腹めがけて跳び、思い切り爪を装備した両手を上から振り下ろし、怪鳥の腹を引き裂いた。

「尻尾巻いて逃げやがった…ってことでいいのか？」

怪鳥はどこかへ飛び去っていった。あのサイガの一撃は相当な痛手になったようであり、飛んで行く姿もフラフラとしていた。

結局、退治はできたものの完全に息の根を止めることはできなかったのだ。サイガは座って自分の爪を研ぐ道具でついている怪鳥の血を落としているが、剣妖は息を切らして横になっていて、楓香にいたっては完全に疲れきったようで大の字になって倒れている。

「ハア…たぶん…な…よし!」

サイガはそう言って立ち上がった。

「何が『よし!』だよ」

「何って…また歩くに決まってるだろ…」

時間帯的には夕暮れ、今までからしたらまだまだ歩いてもいい時間帯だ。が、剣妖もこんな状態なので…

「んな…無茶言っつなよ…」

「えーまだ歩くのおー…」

「当たり前だろ…っってお前は違うだろ！」

突如、話に入り込んできた楓香にサイガは指を指してつつこんだ。  
すると、楓香がよれよれと立った。

「どーせ、あなたたちはルクレイでも目指してるんでしょ？」

「そりやそうだが…」

話を聞いていて、楓香がマジで言っているのだと気づいた剣妖も加わる。

「じゃ、私も一緒に行くわよ」

「…え？」

剣妖もサイガもここで声がそろった。

「別に特に私にも行き先なんてないし、ここで一生過ごすなんてどうかしてるしね…」

『やっぱり…こいつここに住んでいたのか』

「（そうみたい…だな…）」

こうして楓香がともに旅に着いてくることになった。さすがに「やめたほうがいい」とは言われたが、彼女が押し通したので、別にそこまで止める理由もなかったため、同行することになる。どうやら楓香の話によると彼女はルクレイへは一度だけ行ったことがあるらしいので、道を詳しく教えてくれるとのこと。しかし、剣妖と楓香の二人が疲れていたということで、結局この日は出発することなく、野宿となった。

その夜のこと

「（なあセイズ…）」

『なんだ？』

日は完全に沈み、楓香が取ってきていた果実で空腹を少し満たした後のことであった。

「（楓香ってエイレクスの名前だよな…深理もエイレクスの苗字だ

し……」

『それがどうかしたのか？』

「（いや、あきらかに楓香はエイレクス人じゃねえだろ……）」

『わからないぞ、ハーフ×ハーフのクォーターだったりしたらここにいても……いや、それでもおかしいか……』

「（……ま、とにかくそこまで関係あることじゃあないけど、気にはなるんだよなあ……）」

こうして旅の仲間は3人となったのであった。

## 第18話 契約というもの（前書き）

今回の話は若干説明が多く、そのため会話が少し多いです。

## 第18話 契約というもの

さて、あの怪鳥が襲ってきて楓香が仲間になった翌日、3人は楓香に誘導してもらいながらルクレイへと向かっていた…が

「絶対ずるい」

楓香を見て話を切り出したのは剣妖であった。

「えーそう？」

「昨日、歩くって言ってたじゃねえか！」

「だってえ…やっぱり走るのは疲れそうだし…」

なぜこうなってるのか、簡単な話だ。楓香は飛んで進んでいるからである。飛ぶことは疲れはするが、さすがに走るのよりは楽しい。

『ま、別にいいんじゃないか？』

「うう…」

すると、楓香はかなり高い位置まで飛んでいった。

「？何してんだ…あいつ」

楓香は剣妖とサイガからはよく見えないが、辺りを見渡していたように、すぐに元の場所に降りてきた。

「この道からなら夕方くらいまでには着くと思うわよ」

「（道を確認してたのか…なんかさりげなくこういうことやられると飛ぶこと否定できねえな…）」

そうして日が沈みかけてきたころまで歩くと…

「あー！」

「はあ、はあ…ようやく…着い…た…のか…」

「やつ…た…」

ついに3人はルクレイへとたどり着いた。しかし、楓香は完全に余裕であるが、サイガも剣妖も疲れきっている。理由としては、一切食事を取っていない、休みなし、時々走った…であり、更に剣妖に

いたってはおそらく昨日の疲れと、もともと体力がないというものもある。

ということで、3人ともルクレイの中へと入り、とりあえず休めそうなところを探すことにした。

「都市部の入口だし、なにかあるとは思うけどね」

楓香はこんな感じで元気だが、剣妖もサイガも歩くことですら辛いようである。

「宿屋でもカプセルホテルでも何でもいいが…」

「…そういえばこの前の病院はどうかできたのかもしれないが、切れ、お前金持ってたのか？」

「金っていうか…これ…」

剣妖が取り出したのは一枚のカードであった。

「…クレジットカードか、なるほどな」

「そ、ジョーカーさんから預かったものさ、結構金はあるらしい…」  
剣妖はそのカードを財布にしまった。

「…ジョーカーさん？」

「あ、ああそつか…楓香は知らねえんだもん…」

「ま、休めるとこ見つけたら話してや…」

そんなこと言って歩いている間に彼らの目の前にホテルと書いてあるビルのな物が現れた。3人とも入口の前に立って確認しているの間違いはない。

「ホテル…だな」

「ホテル…ね」

「…って何立ち止まってんだよ、入ろうぜ、別に何の心配もねえだろ…」

ということで3人は入ることに。ちなみにチェックインは剣妖に全て任された。

さて、なんだかんだでとりあえず部屋を確保でき、剣妖とサイガは



休むことにした。が、楓香はたいして疲れていなかったの…

「ねえ、少し町の中とか見てきていい？」

「いや、別にかまわないが…」

「そう！よーし…」

と言つて、楓香は部屋を飛び出そうとした。

「おい！」

と、剣妖が彼女を呼び止めた。

「え…」

「こいつを持ってけ…」

剣妖は先ほどの財布を楓香に渡す。

「あと、オレやサイガならまだしも、お前は何か違う能力持つてんだから絶対使うなよ…」

「え…う…うん…」

「…あと、念には念を入れて聞いておくが、お前は買い物くらいはできるよな…」

「そ、そのくらいは普通にできるわよ！あそこで暮らしていたからつて一応この町には来たことあるんだし…」

そう言つて楓香は外へと出て行つた。

楓香は町の中を歩いていて、が、一度来たとはいえ見慣れないためか、キョロキョロしながら何をすればいいのか分からない様子でもあった。彼女はとりあえずコンビ二を見つけて缶ジュースを買い、ベンチを見つけたのでそこに座つて休んだ。

「（ねえフェリジア…）」

彼女の契約した妖魔の名前はフェリジアという。

「…ん？どうした？」

ちなみにこの妖魔も男である。しかし、別に妖魔が男だけだというわけではない。

「（いや…私つて特殊なの？）」

『いきなり…というかやはり気になっていたのか…うーむ…ちよっ

とした説明になるんだがいいか？」

「（…というかむしろ説明して欲しいわ）」

楓香は缶ジュースのふたを開け、中のジュースを少し飲んだ。

『まあ…簡単に言うとな、妖魔つっのにもいろいろあるんだ（とはいえ人間が勝手に妖魔つて名前を付けたんだが…）』

「（へえ…それが私と剣妖とサイガ二人の違いに繋がるの？）」

『そういうことだ、あの二人はおそらく真人族の妖魔と契約したのだろう…』

「（真人族…？）」

『ああ、妖魔には多くの種族が存在する、真人族はその中でも最も人に近い種類と私たちの間でも言われている…一般的に普通の人間あまりと変りはない、まあ強いて言えば若干の身体能力が高いことあとは超能力とか…多分、そんなかんじだろうな…真人族と契約した場合、基本は身体能力の向上だな、例外もあるが…』

「（…じゃあフェジリアの種族つて…）あ…」

楓香は既に缶ジュースを飲み干してしまった。

『私は亜人種の獣人族、その中の鳥人類だ』

「??????」

楓香はもう何がなんだか訳が分からなくなってきた。

『分かりづらかったか…まあ、獣人族というのはいろいろあってな…その中の鳥の力を持つ一種だと思えばいい……ともかく、獣人族と契約した場合はその妖魔の類の力が能力となるらしいぞ…』

「（ふ、ふーん…なんとなく分かった…分かってないけどね…）」

『どっちだ…とはいえ、契約なんて未知の領域なんだ、妖魔だつてあまりするものも普通いないからな…わかっていることといえ…あ…』

「（どうしたの…）」

楓香は立ち上がってホテルの方に歩き出した。さすがにやることもないということから出た行動であろう。

『…そういえば言っていないことがあったな…』



は二人に話したのだ。そして、二人とも契約した妖魔からその話については一切聞いていなかった。

「ま、いろいろあるらしいわ……」

「（おい、セイズ！…セイズー！……）」

剣妖はセイズを何度も呼んだが反応がない。一方であるが、

「…とりあえずもう夜だ、情報収集は明日と行こうぜ」

サイガは別に気にしていないようであった。

## 第19話 進行禁止？

ルクレイについた翌日の正午前：

剣妖が起き、既に起きていたサイガ、楓香とともに今日の予定の話となった。ちなみに、一番早く起きたのは楓香で、サイガは剣妖が起きる10分ほど前に起きた。

「で、どうすんだ？」

「…とりあえず情報収集…と行きたいところだがゲームとかじゃねえんだ、そんな簡単にいくはずがない」

そもそも旅の理由なんてわけのわからない上に、妖魔なんて話して信じてもらえるのか分らないものだ。

「そんなことよりさあ…」

「？…どうした、楓香」

「お腹すいた…」

朝食着きの宿泊なんかじゃないので、朝から誰も何も食べていない。起きたばかりの剣妖とサイガはそうでもなさそうだが、楓香は違いうつだ。

「……じゃあどっか食える場所でも探すか…」

一瞬、場が沈黙に包まれたが、剣妖の話の切り出しでどこかレストランか何かを探すことになった。チェックアウトはまた剣妖であった。

しばらく歩いた後、見つけたのは…

「ファーストフード…か…」

「ま、少し足りない気もするけどいいんじゃない？」

ということで、朝食（というかほぼ昼食）はそのファーストフード店ですることになった。

数分後：

「ふうー、食った食った…でも少し足りねえかな…」

サイガは腹に手を当ててそんなことを言ってる。が、それを見る  
剣妖は

「…お前一人で代金の半分はいったつっの…」

と、小声で言った。

『で、どうするんだ？あいつら二人はついてくるだけだろ？』

「（一応、この前セリユアーラで届けといたパソコンみてえのがこ  
つちに届いているはずだし、とりあえずはそれを取りに行こうと思  
っている…）」

「？…剣妖、どうしたの？」

立ち止まっている剣妖を不思議と思ったのか、楓香が話しかけてき  
た。サイガも楓香も剣妖から離れた場所にいる。

「え、あ…ああ！」

剣妖はすぐに二人の下に駆け寄る。

「…何やってんだよ切裂…」

「いや、まあ…」

とりあえず剣妖はパソコンを取りにいきたいと伝えた。

「そっぴゃそんなのあったな…オレらあの時いろいろバタバタして  
たしなあ…」

「別に行くあてなんてないから行ってみない？」

というわけで、3人とも剣妖が送っておいたパソコンを取りに行く  
ことになった。

歩いて数分後：

「ここ？」

3人とも建物の前に着いていた。

「ああ、たぶん…」

「ま、さつさと用は済ませますか…」

と、3人が建物の中に入ると…

「あ、やっぱりここに来たね」

「ジョーカーさん!？」

なんとそこにいたのはイレクスで別れてきたジョーカーだった。

「ジョーカーさんって…」

「…確か、切裂に剣を教えた人…だよな…」

楓香とサイガは後ろで小声で話している間…

「…ってか何でここにいるんですか…」

「いやあ…まあ君が気になったのと…ん？あそこの二人は…」

ジョーカーは後ろの二人に気づいた。それに気づいたサイガと楓香もビクツとした。

「……？剣妖くん、あの二人は…？」

ジョーカーは小声で剣妖に話しかけてきた。

「え…あ…ああ………同行者です!」

剣妖も小声で返した。

「（同行者…？仲間…じゃないのか…いや、多分言いつらいだけなんだろうな…）」

「どうしたんですか、ジョーカーさん…」

ずっと考え事をしているジョーカーを見て、剣妖が声をかけた。ちなみにサイガと楓香は後ろでずっとどうしようか分からないでジョーカーの方を見たりしている。

「え、あ、いや…ところでここに来たのは荷物とりにきたからでしょ？」

「あ…まあそうです…けど」

「…ま、とりあえずこんなところで立ち話もなんだしね…」

と、いうことで3人はジョーカーについていき、どこか喫茶店でも探すことに…

その道中、

「なあ切裂、あの人ここまで来たんだったらお前送ってもらったりできたんじゃない？」

サイガがさり気無く剣妖に話しかけてきた。

「いや、オレも来るなんて知らなかったし…ま、もしそれができたとしてもたぶんオレは送ってもらってきてねえよ…」

「っていうか…どうやって来たのかしら…」

「さ…さすがにそれは分からねえな…」

そう言いながら歩いてるうちに微妙なところにある喫茶店を発見し、そこで話することに…

「…で、ジョーカーさんは何でここに来たんですか？」

「いや…実は2、3日前にこの付近に強い空間の歪みみたいな反応があつてね…」

「空間の…歪み…ってそれ…」

『間違いなくインビンジ・ゲートだな…』

剣妖とジョーカー、また剣妖に対してはセイズが話している中、サイガも楓香も話に耳は向けているものの、ジュースを飲みっぱなしだ。

「そ、でも最近じゃ反応がまるつきりないんだ、だから急いでこつちまで足を運んだわけ」

「…じゃあ、もうそのゲートは消えてるって考えるのがベストですかね…」

と、ここで楓香が

「ゲート…ト？」

「あ…そっぴゃ楓香にはまだ説明していなかったか…インビンジ・ゲート、それがオレたちが探しているものだ…魔界と人間界が繋がる唯一の門だっって言われてる…」

「？でも…」

それでもまだ説明不足のようだったので…

「…んじゃあ、詳しいことはお前が契約した妖魔に聞きゃあいいじゃん…オレだって切裂の説明だけじゃよく分かんなかったからな」

「あ、そっか！」

「（それはオレが説明が苦手ってことですか…）」



剣妖は若干歯軋りをしていた。

「…ま、まあともかく…この先君たちはどこに向かうんだい？」

「そ、そのあては…ないですね…一応この町で情報収集しようと思つてたんですが…」

事実、パソコンをとったあとに聞きまわるつもりだったが、結局決断はできていなかった。

「うゝん…なら、やっぱりトイアムに向かう？」

「…トイアム？」

「あ、ごめん、その…さつきインビンジ・ゲートが確認されたって行つた町の名前だよ、ただなあ…」

「ただ？」

ジョーカーは少し悩んでから自分の手持ち立体スクリーンで地図を開いた。

「うお！？」

さすがにこれにはサイガも驚いた。技術が進んでいる中、こういうものも多く作られてはいるが、値段がとび抜けて違うのだ。

「これが今、僕たちのいる辺り、地名だとシエルヴァだね…」

そう言つてジョーカーは3Dのスクリーンのとある場所を指した。

「で、ここがトイアム、見て分かると思ふけど…」

「…あ、間に国がある？」

楓香が気づいたとおり、シエルヴァと示されている場所とトイアムと示されている間に別の色分けされた地域が広がってさえぎっている。

「ここは…？」

「ゴルフイングクレウだよ…ほら」

そう言つてジョーカーが地図を縮小させるとよく分かる。なにせゴルフイングクレウ王国は北アメリカ大陸ほぼ全域を覆う国だ。

「…じゃあ、そのまんま国を横断してけば…」

「…君たちは知らないと思うけどさ、ここ5、6年の間でこの国は一気に規制が厳しくなつたんだ…で、今じゃあ貿易人でも特別な許

可を得たりしなきやいけないし、観光客でも入国時には50000G以上の金が必要らしいんだ…」

「そんなぁ…ってこの先全部ゴルフイングクレウって国通らないと進めないじゃん！」

楓香が地図を見て気づいたとおり、北アメリカ大陸への入り口であるセリユアラからは必ずゴルフイングクレウ王国を通らなければ先に進めなくなっていたのだ。

「こ…これじゃ、ここまで来た意味がねえじゃねえか！」

「ジョ、ジョーカーさん！どうにかならないんですか！？」

と、ジョーカーはフウと息をつき、

「そのために僕がここまで来たんでしょ…」

「え…」

3人ともキョトンとしている。

「ま、着いてきてよ…とりあえずそのまま出発できる？」

結構、突然のことであった。

## 第19話 進行禁止？（後書き）

さすがに学校生活の中で続きを書くのは辛いですが、とりあえずここからは自分も頑張っでできる限り投稿を早めていきます

## 第20話 出航中

「…で、ここって…」

「港…だな」

3人がジョーカーに連れられてやってきたのはシエルヴアの港であった。数分で着き、森の中を歩き続けてきた彼ら、特に楓香には潮風が気持ちよく感じられているようだ。停泊している船もいくつかある。

「…で、なんとなく分かるんっすけど…」

剣妖は1隻だけあった明らかに漁船ではない黒い船に目を向けていた。

「うん、船で送る」

「「え!?!」」

サイガも楓香も船に気づいていなかったようで、驚いて声を上げた。ジョーカーが指差したのはやはりその黒い船だった。

「特別に、ね、っていうか僕自身うまくいくとは思ってなかったけど…ま、とりあえず乗ってよ…」

ということ、3人とも乗せてもらい、トイアムに向かうことに

「（…よく考えたら私は飛んでいけるわよね…）」

『まあいいんじゃないか?』というか誰かに見られたら騒ぎになるだろ、ここはあの人気のない草原じゃないんだぞ…』

「（そ、そうね…）」

3人は船に乗り込んだ。すぐにジョーカーも乗り、船を港から出した。

サイガはデッキに出ている、楓香は船内に入って辺りを見回していたが、剣妖は操縦席に来ていた。

「あの…ジョーカーさん、ちょっといいですか…?」

「言わなくても分かるよ…契約のことだろう…？」

「っ！？」

そう、剣妖が話そうとしていたことは契約のこと、先程の話をしていたときにサイガが楓香に『自分の妖魔に聞けばいい』と言ったのに、ジョーカーはそのことに対して何も言わなかったからだ。

「……何で知ってたのに黙っていたんです…そもそも、そんなこと…どこで知ったんですか…」

剣妖はジョーカーに語り攻める。

「…あの当時は、まるで話せるような状況じゃなかったんだよ…」  
「どういう意味…」

剣妖が話し終える前に続けてジョーカーは語りだす。

「…剣斬さんが亡くなられたあの年…その二年前くらいからハンターの組織は崩壊していたようなものだったのさ…」

「！？」

「その年までは一部のゲートは特定できていた…まあ…戻ってきた人なんていないけど…でも問題はそこじゃない、ゲートが不規則に出現したり消えたりするようになったんだ…」

剣妖は口を挟むことなくただジョーカーの話を聞く。

「一応、僕達ハンターが撃滅させる目標は危害を加える妖魔だけだった、だから危害を加えず協力する妖魔と契約した者もいた…国際政府の目を欺いてね…ただ、妖魔から情報なんて聞きだせないけど…それは君にも分かっているよね」

剣妖はコクリとうなずく。理由は知っていた、その情報はサイズと契約した瞬間に頭に入ってきたからだ【妖魔は人間と契約してしまうと自分達に関しては何も話せなくなってしまうようになる】という…

「何より確かな情報は、魔界にある…唯一の確かなことはそれだけ…だと思つよ」

「それは…そうです、だから俺も魔界へ行きたい、いや…行かなきゃいけない、そうしなきゃ…何も始まらないから…」

剣妖は黙って出て行く。と、

「…まあ、ともかく今はトイアムに向かうよ、あの町は何かがある  
…きつと…」

最後にジョーカーがそう言った。

「切裂か…」

操縦席の部屋から出た剣妖にデッキにいたサイガは気がついた。

「ん？ああ、サイガか…」

「…切裂、お前は…俺がどうして……………」

サイガは語りだしてすぐに下を向いて話すことを止めた。

「ん？急に…どうした？」

剣妖は何の気なしにサイガに近づいて、デッキの端に寄りかかる。

「あ、いや…なんでもない…俺は、ただ単にお前に勝てなかったこ  
とが…」

「いや、何か隠してんのが丸分かりなんだが…」

サイガは強がりを見せつつも焦っていたが、空気を読まずに剣妖は  
突っ込んだ。

「うぐ……………」

サイガは齒を食いしぼり、なお強がっていた。それを見て剣妖は息  
をつく。

「はあ…言えよ、つつーか言わねえと、こっちが気になりまくるし  
…」

「か、関係のない話だ…これは俺自身の問題だ」

「やっぱり何かあるんじゃないか…」

「くっ…」

「…分かったよ、今は深くは聞かねえ…ただ…」

「…」

「話せるときが来たら…いや、お前が話さなきゃいけないって思っ  
時が来たら、そのときは…はつきりお前の口からそのことを俺に伝  
えてくれよ…」

剣妖の目は真剣な眼差しだった。サイガは息をついて再び海に目を向ける。

「……すまない」

と、サイガは小声でつぶやいた、が、

「ん？なんか言ったか？」

「……切裂……」

「？」

「やっぱりお前は俺が倒す！そうじゃなきゃ納得いかん！！」

サイガは剣妖を人差し指でビシッと指して大声で叫んだ。

「（いや、意味がよく分からん……）」

『文字通りのことだろ、気付け』

剣妖はため息をつく。

「わーかった分かった（俺なんか変なことした……？）」

『ああ、した』

剣妖はデッキから降り、船内に入る。中にいた楓香はジョーカーから渡されたカバンの中身を確認していたようだが、すぐに剣妖にも気づいた。

「あ、剣妖、ジョーカーさんって人と何か話してたの？」

「まあ……ちよつとな、ところで、そのカバンって、結局何が入ってたんだ？」

そう言いながら剣妖はイスに腰をかけ、足を組んだ。

「んーっと……保存食、水、衣類、タオル、つてとこかな」

「なんか災害時に持ち出すようなもんばっかだな……」

剣妖は苦笑いをした。

「あ、あとこれ」

「ん？」

楓香が手に持っていたのは、ジョーカーが使っていた立体スクリーンの地図が出るアレだった。手に収まるほどのサイズなのは同じだが、ジョーカーが使ってたのは赤かったのに対して、今、楓香が手

に持っているのは青色だ。

「あ、そいつか…入ってたのか？」

「うん、使うかもしれないし、あったほうがいいよね」

「そう…だな…」

「あ、剣妖、さつき外でサイガといういろいろ話してたみたいけど…」  
楓香はそれをカバンにしまいながら、ふとさつきの事について剣妖に話を振る。

「あ、別にたいしたことじゃ…」

「全部聞こえてたよ」

「なんだ…」

「…そういえば剣妖は何で旅に出ることにしたの？」

不意に楓香が質問してくる。具体的にではないが、既にサイガには話していたことだが、楓香はあとから勝手に着いて来たも同然なので、剣妖のことなど知らない。

「オレが…旅に出た理由…？」

「うん」

「（…確かに楓香には話してなかったしな…）うーん…簡単に言えば…妖魔を知るため…かな…」

「妖魔を…知る…？」

楓香は不思議に思ったようだ。というか、理解できたらそれはそれでおいしい。

「昔、いろいろあつてね…10歳からそんなことは考えてた」

「10歳…？学校とかは？」

「行ってない、というか…最低限のこととかは自分で学んだ…だから字とか苦手だけだな」

「ふーん…」

「あ…」

「どうかした？」

と、剣妖はここで、自分が楓香に対して同じことが気になっているということに気がついた。



「…そういや、お前こそ、なんであの時あんな場所にいたんだ…？」  
「へ？私…？」

「ああ、お前」

「ん…んーっと…い…家出…かな…」

「い、家出っ！？」

剣妖はかなり予想外の答えだったからか、組んでいた足を解き、身を乗り出した。

「ずいぶん…前の話なんだ…私、よく知らないけどママやパパは知らないの」

「知らない…って…家出するまで一緒に住んでいたんじゃないのか？」

「うっん、すんでいたのはおばさんと姉だけ、姉は私が6歳の頃にどっかに行ってしまったわ」

「はあ…家出の理由は？」

「おばさんは姉にだけかまっていたの、私はおまけみたいな扱いだったわ…姉だけ消えて、そしたら、もう、なんでも投げやりな感じよ…それが嫌になって出てきた、で、草原で出会ったフェジリアと契約したの」

「…食料とかは…？」

「もちろん自給自足よ、あ、でもたまに家から持ち出した金でライターとかは買いに行ってたわ、生肉だとさすがに死んじゃうもの」

「（野生児かよ、ライターってのも相当苦労したんだろうな…）」

剣妖は変な妄想を広げた上で苦し紛れに笑った。

「…ハ、ハハ…そ、それはそれで…苦痛だったんだな…」

「そうね、でももうその分と同じ以上の人生は過ごした、だからそこまで深くは考えてないわ、剣妖たちとも会えたんだしね」

「フッ、ありがとう…と言え方がいいのか？」

「さあね？」

それからしばらくし、あたりも暗くなり始めたころ、剣妖らの乗った船はトイアムに着いた。

が、なにやら外はいろいろと騒がしい。パニックではないようだが、ライトアップされた場所に大量に人が集まっているのがかすかだが分かる。

「何やってんだ…」

サイガも船内には既に入っていた、そこにジョーカーが降りてくる。

「選挙やってるんだって」

「選挙お！？（でもまあ…だったらここまで騒がしくてもおかしくない、か…）」

剣妖はそう思つてすぐに納得はできたのだが、他の二人は違った。

「…選挙って…何？」

「俺も分からん」

「…約二名分かつてないみたいだけど…」

「えへへ…」

「ん…」

ジョーカーは二人の反応を見てなのか、口元が少し笑った。

「簡単に言えばその区間の政治を統一する人を選ぶものさ」

「政治って何だ？」

ここでジョーカーも凍りついた、同時に剣妖は2人の肩に手を置いた。

「お前ら…ここじゃキリがない…寝る前にさくつと解説してやつからジョーカーさんに迷惑かけないでくれ…」

サイガも楓香もキョトンとしていたが、なんとなくうなずいた。

「ま…まあ、こんな中で、町中に出てくのもどうかと思うし、今日は船で休んでく？」

で、なんとかジョーカーも話せるようになっていた。

「そうしたほうがいいかもしれませんね…」

「じゃあ、町の搜索は明日ね」

「詳しいことについては明日の朝、またいろいろと話すよ、そのの

階段から上がってけば何にもないスペースがあるから利用して、僕は今日は船を見張っとく、心配はないけど万が一ってこともあるしね」

ジョーカーが指差す先に階段があった。部屋の奥の方だったが…

「（気づかなかった）」

『お前…俺は気づいたぞ、入ったときに』

「（あんなとこに階段があつたなんて…）」

『どうりで興味深い性格のお前が行かなかったわけか』

「ん？どうした、切裂、深理… 呆然として…」

「う…」

こうしてこの日は3人は船で寝ることになったのだった。

しかし、トイアムではこの時よりも前からある事件が起きていた

…

## 第20話 出航中（後書き）

20話自体はずいぶん前からできていたものの、投稿がかなり遅れてしまいました

次話もできあがっているのですが、22話との同時投稿にしようかと思っています

それと、見た感じ前半が少し短め、かつ文章が…という状態です。一段落が着いたら修正入れる予定です（話数若干減？）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1765d/>

---

妖魔紀伝

2011年3月24日07時34分発行